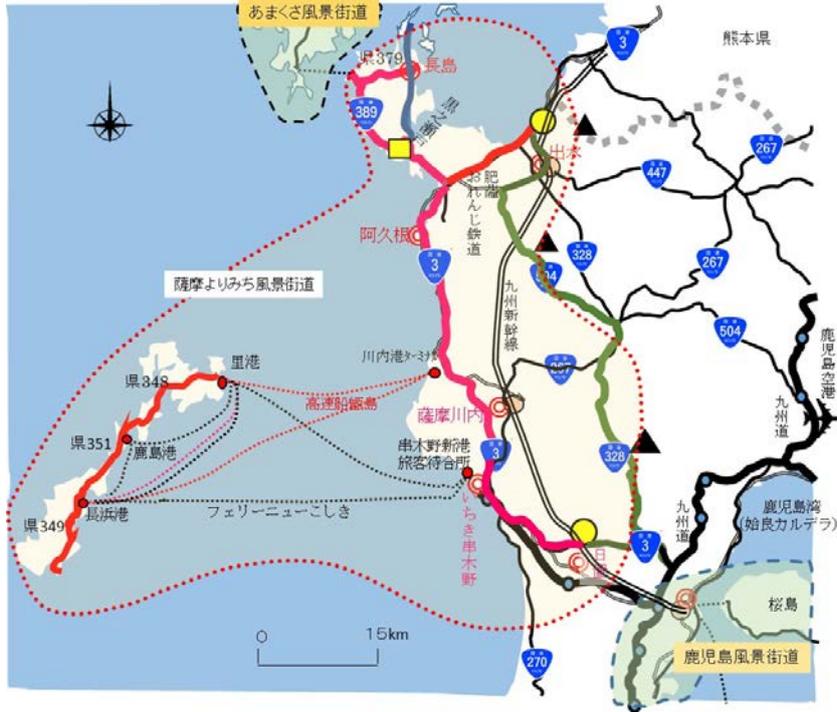


薩摩よりみち風景街道



長島町	人口	9741人	面積	116km ²
出水市	人口	51931人	面積	330
阿久根市	人口	19228人	面積	134
薩摩川内市	人口	92325人	面積	683
いちき串木野市	人口	27382人	面積	112
日置市	人口	47030人	面積	253

2020年5月1日現在

人のくに 美のくに九州 (日本風景街道 Q-11)



① いまなお中世・近世の面影が残る入來麓の武家屋敷 (薩摩川内市)

薩摩よりみち風景街道

始良カルデラ大爆発で形成された切立つ特殊な
シラス大地を駆け巡り

特別天然記念物・一万羽のツルが舞う空の下で
自然のパノラマを満喫しながら

ヤマト以前からの薩摩隼人の地に島津が確立した
麓（武家屋敷群）を訪ねる

- ② 出水平野（出水市）に乱舞する渡り鳥・ツルの大群（出水市観光協会ホームページより）



- ③ 国定公園・甕島の鹿島断崖
（約8千万年前の上部白亜系堆積岩で、
砂岩頁岩の互層をなす）

目次

一	薩摩隼人の地に行く「薩摩よりみち風景街道」	1
1	シラス台地に広がる薩摩隼人の北薩摩地域	
2	「薩摩よりみち風景街道」とは	
二	大自然のパノラマを眺め、北薩摩の麓を巡る	5
1	スケールの大きな五色の大自然を巡る	
2	薩摩藩の武家屋敷群からなる麓を巡る	
三	文明を築いたそれぞれの薩摩のまちに行く	15
1	季節で異なる「いずみ地区」の回遊	
2	北薩の中心地「せんだい地区」は歴史の宝庫だ	
3	鹿児島市郊外のいちき串木野と 日置市の伊集院町に行く	
4	八千万年前の大地が招く甑島を海遊する	
四	「薩摩よりみち風景街道」のホテル、特産品など	27
1	秘湯と共に、まち、島のいたるところに宿はある	
2	海、山、川の多彩な特産品	
3	祭り、イベント	
4	情報案内および道の駅	

巻末地図一覧



⑤ 針尾公園（長島町）から天草方面を望む



④ 東シナ海を直接感じることができる牛ノ浜（阿久根市）



⑦ 海岸に迫り切り立つシラス台地（国道270号の日置市東市来町伊作田江の口漁港近く。）



⑥ 1865年、藩命で若者が英国留学に旅立った羽島浦（いちき串木野市）。建物は薩摩藩英国留学記念館

一 薩摩隼人の地を行く「薩摩よりみち風景街道」

1 シラス台地に広がる薩摩隼人の北薩地域

鹿児島県は、かつての薩摩国、大隅国および日向国（一部）を包括し、現在では7つの振興局・支庁に分けられる。そのうち、北西部の北薩地域振興局管内の東シナ海沿岸域を主とし、これに鹿児島地域振興局の隣接地を加えた一帯が、旧薩摩国の北部であり、通常、北薩摩あるいは北薩と称している。大雑把に言えば、「薩摩よりみち風景街道」はそうした北薩地域の範囲に設定された日本風景街道である（表紙の地図および図2参照）。

a 火山灰のシラス台地がらなる北薩摩

ところで、太古のことになるが、鹿児島湾地域はかつて地溝帯であり、10万年も20万年も前に加久藤カルデラや阿多カルデラなどの大噴火があった（左図参照）。そして、約2万9千〜2万6千年前に鹿児島湾の湾奥の始良カルデラが大爆発した。その火山灰を「始良Tn火山灰」と呼んでい

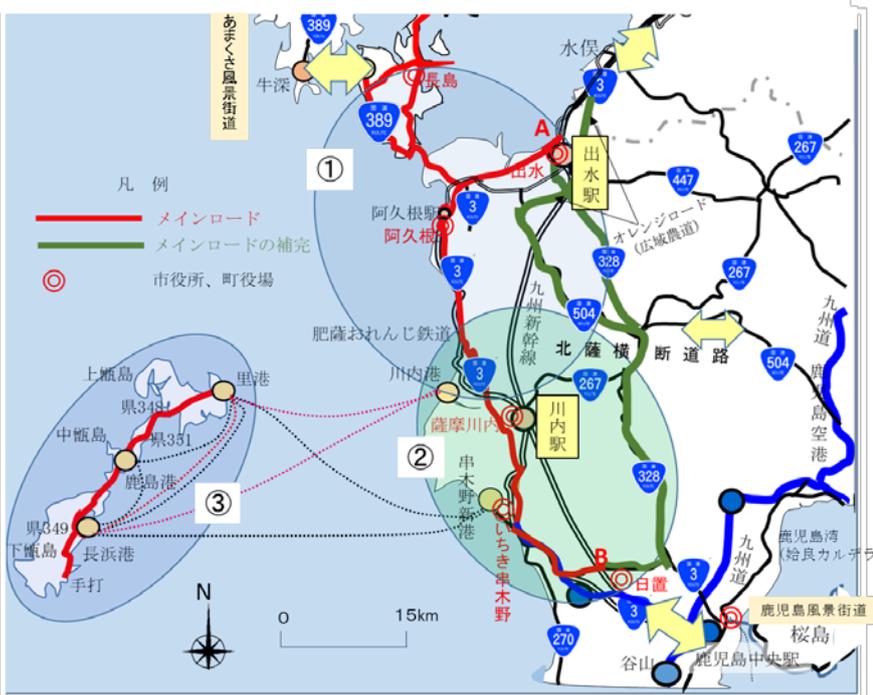
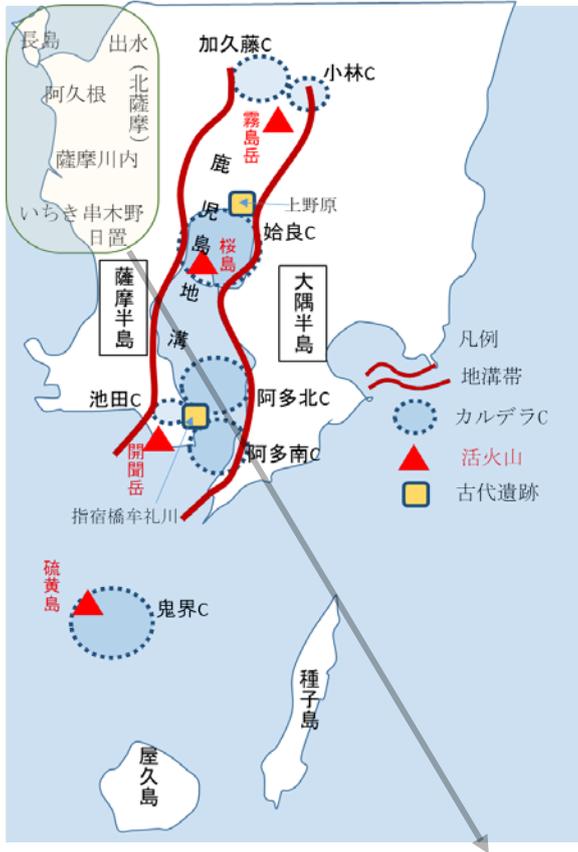


図1 「薩摩よりみち風景街道」の3ブロック構成と主要な流出入路、拠点

b 隼人の人々が歴史を刻んだ北薩摩

る。始良に加えて「Tn」が付され、何かと思われるだろうが、これは当初、丹沢山地（神奈川県）に分布する地質を丹沢軽石と名付けたことの名残である。しかし後に、始良カルデラが起源であることが分り、いまでは「始良丹沢火山灰」または「AT火山灰」と呼んでいる。

つまり、鹿児島湾奥の大爆発の火山灰が偏西風によって関東あるいは東北地方にまで達し、わが国の大半を被り尽くした。AT火山灰の呼称はその証であり、全国各地の皆さんの周りでも、この始良からの太古の便りを見つけていることができよう。そうした巨大な火山の爆発によって、南九州一帯は火山灰や火砕流で被われた。これがいわゆる白い砂の意味を持つ特殊な土砂層のシラス台地であり、急峻な崖や美しい白浜など、北薩摩地域における地形・地質に関わる根幹をなしている。

一方、薩摩地域は、日本神話の「海幸彦・山幸彦」伝説における海幸彦を祖神とするとも語られる人々の地であり、古代からの遺跡や風習、地質、気候などにし独自のものがある。つまり、南方からの帰化説など諸説がある中で、いつからか、どこからかは不明だが、神話が語られることからしても、薩摩には早い段階から人々が住み着いていたといつてよい。

あるいは、霧島市東部の台地（標高250m）で、縄文、弥生時代の上野原遺跡（上野原縄文の森公園）が発見され、各層の間で時代を区切るかのようには桜島の噴火による火山灰が挟まれているが、その最も古い層は縄文時代早期前葉（約9500年前）のものであり、日本列島最古の集落跡である。このことから、薩摩地域には早い段

階から人々が住みつき暮らしていたが、こうした人々はヤマト王権でなく、また熊襲説もあるが、大方ではそれらとは別の隼人（はやと）族と考えられている。

すなわち、隼人の名称から、勇猛敏捷な人々とイメージできるが、古くはヤマトと風習を異にし、わが国のヤマト政権が確立する過程で幾度かの反乱を起こしている。

そして、702年に薩摩国（鹿児島県の薩摩半島側の半分）、多禰国（たねのくに。種子島、屋久島などの諸島）が、713年に大隅国（鹿児島県の大隅半島側の半分）が成立し、隼人も令制国に組み込まれ、官職の一つ隼人司となった。さらに、824年に、多禰国は大隅国に編入されている。

c. 薩摩・島津の歴史を概観すれば

8世紀の前半に薩摩国の国司が、後半には薩摩守が代々任ぜられ、都から着任した。その中に、万葉集に名を連ねる薩摩守（764〜5年）の同伴家持（おとおものやかもち）がいる。みんなもよく知る同伴旅人の子で、三十六歌仙の一人であり、万葉集の編纂に関わった人物である。

薩摩川内市の川内駅前に同伴家持の銅像があるが、薩摩国の国府があったとされる場所の近くの川内歴史資料館裏手を少し歩いたところの「万葉の川筋散策の路」にも銅像⑧が建つ。写真に見るように、銅像のすぐ後ろを九州新幹線が通るが、それを目の当たりにすると、現代から万葉の時代にタイムスリップする思いである。

その思いのままに、薩摩の歴史を概観すると、平安時代中期には、大宰大監（だいがん）だった平季基（すえもと）とその弟平良宗が日向国島津院を開発、これを閩白の藤原頼通に寄進して島津荘が成立した。

そして、鎌倉時代の1185年、源頼朝から近衛家の下級家司であった惟宗（これむね）忠久が島津荘の現地荘官の責任者（下司職）に任じられ、島津性を名乗った。

その後、島津は、地元領主、大隅、日向の有力一族と対立しながらも、これらを制圧し、ついに薩摩国、大隅国、日向国をまとめる守護職となり、現在の宮崎、鹿児島両県に及ぶ広大な土地を手に入れた。九州の総面積の3割を超え、わが国最大規模の荘園の誕生である。

さらに紆余曲折はあったが、島津氏は戦国大名となり、九州制圧を目指し、筑前国・岩屋城などの戦い（1586）に挑んだ。しかし、最後は、大軍を率いた豊臣秀吉の九州征伐に屈し、和睦（写真④）。続いて、関ヶ原の戦いに西軍方として臨んだが負け戦になるも、敵中を突破し、交渉の末、徳川から領土を安堵された。これは、「島津の退き口」といわれる勇猛な敵中撤退の行動をたたえたことによるなどの説がある。

江戸時代の島津は外様大名として乗り切るとともに、その末期には篤姫の徳川家への輿入れがあり、公武合体派の雄藩として躍動した。あるいは、薩英戦争（1863）の辛酸をなめつつも、藩主・島津斉彬による薩摩近代化の促進があり、幾多の人材の

育成があった。そうした中で、西郷隆盛、大久保利通などを輩出し、開国討幕の明治維新が成し遂げられたことはいままでもない。波乱に満ちた薩摩の歩みであり、薩摩の人々の誇りでもある。

2 「薩摩よりみち風景街道」とは

- 要するに、薩摩の一角は、
- (1) 加久藤カルデラ、始良カルデラなどの大噴火をベースにするシラス台地の地形・

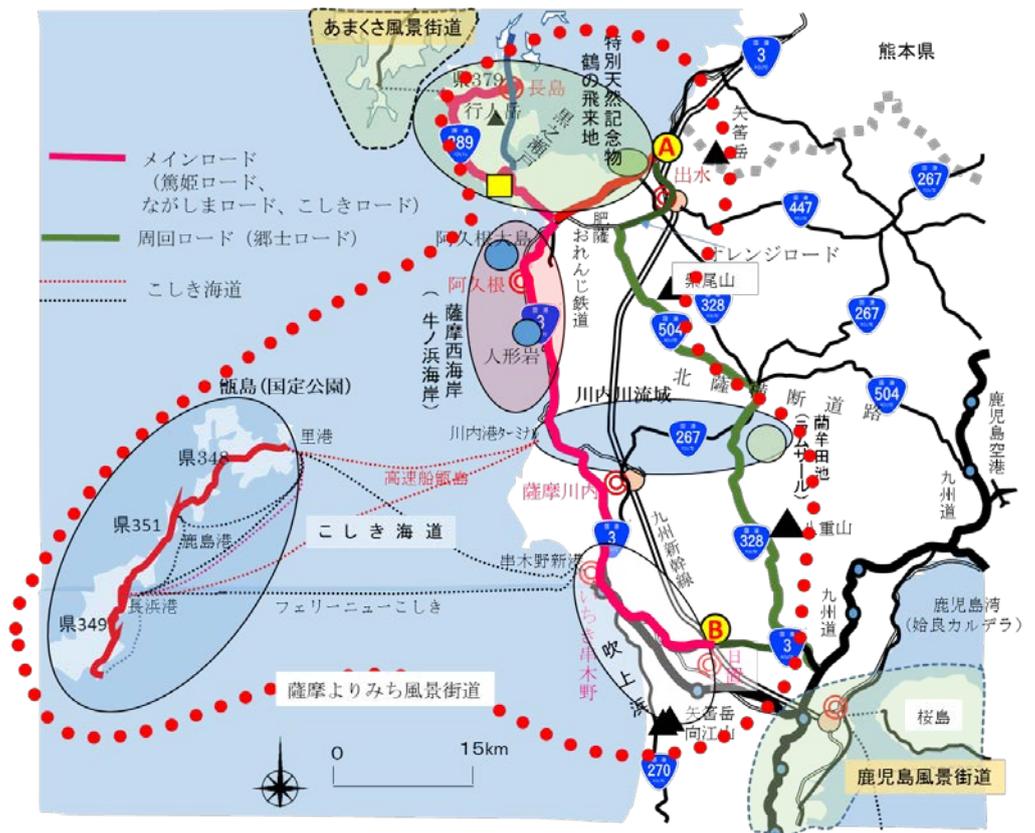


図2 スケールの大きな自然風景を巡り、歴史をたどる「薩摩よりみち風景街道」

地質が主をなす。

- (2) ヤマトとは異なる古くからの隼人族から受け継ぐ血脈があると推察できる。
- (3) 平安時代中期に大荘園・島津の荘ができて、それが明治へと続く中で、一貫して島津家が統治し、九州の中でも稀にみる長い歴史の積み重ねがある。

こうした3点のことが未だによく伝わる薩摩地域である。薩摩藩は大きくは薩摩、大隅、日向に区分され、その中で、大隅半島から北薩摩地域の一角は、薩摩隼人の国であり、本風景街道地域はその北西の地域一帯を巡るために構築されたものである。

あるいは見方を変えれば、九州本島にあって、西海岸、南海岸の一角を繋ぎ、南からの黒潮が対馬海流と分岐する位置にある。このことから、わが国における黒潮文化の起点をなすといえ、熱帯と温帯を繋ぐ亜熱帯地域で、アジア大陸や南方諸地域と繋がる自然や火山のめぐみがある。あらゆるシナ海、火山とシラス台地が織りなす大地で、わが国や九州の誕生・成立に関わる思いもよらない歴史ロマンが繰り返されてきたともいえよう。

阿久根市と長島町を繋ぐ黒之瀬戸大橋を渡ったすぐの「うずしおパーク」に、万葉の歌4首の石碑があり、万葉集の歌の南限といわれている。うち一つは写真⑨に示す大伴旅人の歌であり、もう一つをあげれば長田王の歌がある。

「隼人の薩摩の瀬戸を雲居なす 遠くも我は 今日見つるかも」

これをよむと、1300年前も、いまも同じに思える。このことは逆に、未だよく知られていない雲居なす北薩摩を訪ね行くことが、その期待と感動に加え、見たこともない隼人の風習や出来事、生活が堪能でき、体験できよう。

a 「薩摩よりみち風景街道」の範囲について

本風景街道地域を、現在の自治体で見れば、長島町、出水市、阿久根市、薩摩川内市(甕島を含む)、いちき串木野市および日置市(東市来支所管内)の5市1町である。これら6自治体の全人口は、表紙に示すように、合わせて25万人で、面積は1628km²。鹿児島県下に占める割合は人口16%、面積18%であるが、広々とした自然の中で、前述した有史以来の多彩な遺跡や歴史、文化が人々の暮らしの中に幾重にも刻み込まれている。

「薩摩よりみち風景街道」区域で、海岸線に国道3号が通過する。(このことから、市街地の展開や地域資源の多くが海岸線に沿っている(図1))。

一方、内陸部の大部分は、シラスが積み重なる台地であり、中山間地である。そのうち、熊本西南の県境にある矢筈岳(標高687m)、北薩地域の最高峰・紫尾山



⑨ 黒之瀬戸および黒之瀬戸大橋と万葉集における大伴旅人の歌(長島町、うずしおパーク)



⑧ 大伴家持像(薩摩川内市、万葉の散策道)



(標高1067m)、その南の八重山(標高676m)のラインに沿い多くの山々が並んでいる。そして、それらの谷筋や尾根、峠を越えて、国道504、328号が通る一帯は、日常的に北薩の沿岸域と深い関わりを持つ。

この日常的なつながり、アクセスを含む交通環境、後述の地域資産の構成と展開、および海上を含めた甕島航路の存在を踏まえると、国道3号など(図1の赤ライン)を主としながらも、これと前述の山側2つの国道、および広域農道(オレンジロード)のルート(同図の緑のライン)による北薩地域を囲む道路が基幹となり、その一帯が暮らしの上で一つに纏まっている。このことから、この周回ルートと、薩摩川内市に所属する甕島を一緒にして「薩摩よりみち風景街道」の範囲を提案するものである。

b メインロードとその補完道路―北薩の道路網について

★篤姫ロードと郷土ロード

江戸時代の薩摩街道を熊本から南下すると、薩摩藩内で出水筋、大口筋、高岡筋(宮崎方面)に分れている。その中で北薩摩地域は出水筋に沿っている。出水、阿久根、向田(薩摩川内市)、串木野、市来、伊集院の各宿場町を経て鹿児島に至る。本ルートは、薩摩の里で伸び伸びと育った篤姫が、江戸幕府徳川家への嫁入りの際に通ったとされる。どんな思いで駕籠にゆられたのだろうか。そのことを含め、本風景街道のメインロードとして「篤姫ロード」との愛称を付けることができよう。

一方、山間部のシラス台地は崩れ易くもろい。このため、狭いながらも多くの台地があり、雨水などで削られた幾筋もの複雑な谷地形をなしている。平地が少ない、保水が十分でない。

これらのため、人々は谷間のわずかな土地で、しがみつくように耕し暮らしを立ててきた。

反面で、各地に点在する高台は、防備を兼ねた山城をつくるに適したところであった。眺望すれば、まさに神話の世界の高殿(千台ともいった)が広がる。このことから、中世には、高台から高台へと山城がいくつもいくつもつくられた。そして、近世にはそのやま裾に外城制度が整備され(第二章2節参照)、防備を兼ねて半農半士の武士(これを郷士と称した)たちが住みついた。このことがいわば村から村を結ぶ小道や山道の発達を促した(図3参照)。

すなわち、大小の川や山々が連なる尾根に沿う峠越えの道筋がある。その中で、前述の国道504、328号(図1の山側の緑のライン)は、北薩地域と加久藤カルデラ(湧水町、えびの、霧島、小林などの盆地)や錦江湾に面した鹿児島地域と一線を画すものである(図2)。その意味で、これまた北薩地域の東の縁辺を形成する道路となり、郷士たちがその守りにつくつた道である。表の華々しい篤姫ロードに対し、勝手口的な意味合いがあり、あるいは裏通りの速達路として、風景街道を巡る準メインロードとなり、その特色にもとづけば「郷士ロード」といえよう。

★長島ロード、甕ロード、およびこしき海道、

当然ながら、海岸沿線を走る篤姫ロードが本地域のメインだが、これに離島の長島町へは国道389号、県道47号、379号が分岐してつながり(図7)、この区間を「長島ロード」と名付ける。

一方、甕島へは、図2に示すように、孤島ゆえに海路(以下、こしき海道という)が必要であり、その上で上甕、中甕、下甕を縦断する県道348、351、349号のルートがある。幸いに、上甕、中甕島の間が、早い時期から長大橋(甕明神大橋、鹿の子大橋)で結ばれていた。加えて、中甕島と下甕島間の甕大橋⑩が、2020年に出来上がった。今では3つの島が、「沖の平瀬に」とんと打つ波は、なぜか出船の邪魔をする(甕島のうたばやしの一節)から脱却し、それらの県道はひとつつながりであり、いつでも島々の間が行き来でき、「甕ロード」と呼べよう。

まとめれば、メインロードは、d項に述べるブロック構成を踏まえ、篤姫ロードと長島ロードによる東シナ海に接した沿岸のメインロード、山間部の郷士ロード、および甕島にわたる高速船やフェリーによるこしき海道と島々を結ぶ甕ロードの5リンク構成である。道路網の整備がよく行き届き、自然の風景や薩摩隼人の暮らし、歴史遺産、豊かな文化に触れられ(二、三章)、多彩かつ快適なドライブが楽しめよう。

c 「薩摩よりみち風景街道」地域へのアクセスについて

★道路によるアクセス



⑩ 台風被害を乗り越えて建設された甕大橋 (2020年竣工)

「薩摩よりみち風景街道」地域へのアクセスは、道路による場合、九州北部、中部からは南九州西回り自動車・国道3号(篤姫ロード)と、九州自動車道から郷士ロードへ至る2ルートがある(図1、2参照)。前者は九州の西海岸を行くもので、熊本県側は水俣市から南下することとなる。後者の九州自動車道は、八代から人吉に抜け、えびの、霧島を経由する。このことから、九州自動車道各ICと本風景街道地域とは、国道447、267、504号などを介して30〜60分のドライブが必要となる(図2参照)。

一方、九州自動車道沿線に鹿児島空港があり、そこは国道504号がつながり、現在では北薩横断道路(地域高規格道路)として整備が進められている。

県都・鹿児島市からは、国道3号を北上すれば、これまた、ほぼ篤姫ルートに同じところを南九州西回り自動車道が、鹿児島市から八代、水俣市に向けて整備中である。現在は部分開通状態だが、全線開通時には本風景街道内の各地への速達的なアクセス路として大きく寄与することはいうまでもない。

★鉄道、航路によるアクセス

道路以外には、九州新幹線があり、域内にJR出水駅および川内駅の2駅がある。福岡から1時間12分(最速)、熊本から30分、鹿児島から10分のところである。また、域内の並行在来線として、肥薩おれんじ鉄道、JR鹿児島本線が往來している。これらと路線バス、巡回バス、高速船、フェリーを活用すれば、公共交通を用いて本風景街道地域へのアクセスおよび域内循環が可能である。ただ、これらは沿岸域に集中し、内陸部のサービスは必ずしも十分でない点で注意が必要である。

変わったところでは、熊本県天草市の牛深から、長島・蔵之元港へのフェリーがある。島原からの海の国道389号(長島ロード)によるアクセスであり、隣接する「あ

まくさ風景街道」につながっている。

d 「薩摩よりみち風景街道」の3ブロック構成とは

「薩摩よりみち風景街道」を本章1節に述べた範囲とするにしても、その資源の分布や、前述の交通条件、地理的条件を踏まえれば、図1に示すように、概略3つのブロックに分けられる。出水・長島および阿久根（以下、いずみ地区という）、薩摩川内の本土部分といちき串木野・日置市の東市来町（せんだい地区）、そして甑島（こしき地区）である。

★いずみ地区 現在、出水郡といえは長島町のみだが、1889年の町村制施行時は8つの村であった。それが時代の変遷を経ながら平成の合併で出水、阿久根、長島の2市1町となり、互いに国道3号と389号で繋がっている。

あるいは、九州新幹線で出水駅を介してのアクセスとなり、隣接の「あまくさ風景街道」とはフェリーでつながる。いわゆる特別天然記念物・鶴の飛来地②があり、「薩摩よりみち風景街道」はもとより、新幹線出水駅から蔵之元港（長島町）へのシャトルバスが運行され、「あまくさ風景街道」への表玄関でもある。また、北薩地域の最北辺がいずみ地区で、出水市の中心地には薩摩藩最大の武家屋敷群・出水麓（日本遺産）があり、本風景街道の目玉の一つである。

★せんだい地区 薩摩川内市からいちき串木野市、日置市に至る区域だが、肥薩おれんじ鉄道、JR鹿児島本線、そして国道3号（篤姫ロード）が通り、甑島への高速船航路の発着点でもある。あるいは、九州新幹線でわずか10分であることから、鹿児島市の通勤通学圏である。こうしたことから、鹿児島都市圏の週末型、都市近郊型のリゾート地といった感がある。つまり、せんだい地区は、本風景街道の中心をなす地区であり、同時に、鹿児島市を訪れたついでに、桜島、指宿とともにせんだい地区への回遊がまた十分に期待できる。

★こしき地区 甑島（こしきしま）は、平成27年に国定公園の指定を受けた島である。川内港から高速船で50分、串木野新港からフェリーで70分のアクセスであるが、上甑、中甑、下甑の3島が連なり、8千万年前の大地と手つかずの大自然がそっくりそのまま残されている。その一方で、こうした島々までもが、次章2節に述べるように、江戸時代に外城制度が適用され、麓が築かれたが、その武家屋敷群にいまだ人が住み、継承されている。

二 大自然のパノラマを眺め、北薩摩の麓を巡る



ツルの北帰行（第1回写真コンテスト受賞作）



出水のツル観察センター

① 特別天然記念物ツルとその観測所

風景街道として、「薩摩よりみち風景街道」の特色は何か。それを明かにする観点から、全域に共通するテーマを探れば、次の2つが強調できる。

一つは大自然である（図2）。出水の鶴の飛来といった地球規模の自然があり、甑島には8千万年前からの地層の積み重ねを直接見ることが出来る時を超えた大地がある。これら、あるいはそれに類する自然を求めて、北薩摩地域を巡れば、その中で暮らす人々が自然という手のひらの中にあるとの実感が湧き、その雄大さと不偏性を目の当たりにできる。具体的な内容と規模を踏まえれば、特に図に示す5か所の大自然が浮かび上がる。

いま一つは、特殊な土質層シラスが全域を被い、そこに早い時代から住み着いた薩摩隼人と呼ぶ人々が繰り返り広げた中世、近世の象徴としての外城制度と、その拠をなした麓（武家屋敷群）が存在することである。独特の防衛と統治を両立させた地域システムであり、本来的に中世からのもので、自立的に長い間を生き抜くもとなり、現代社会に通じる地域創生の参考になるとも考える。

つまり、北薩地域の歴史や遺跡を訪ねることは、単なる歴史遺産や神社仏閣を巡ることではない。中世から現代に至る郷土社会を中心にした独特の地域システムを巡り、その内容や歴史を理解し、神髄に触れることが、現代の困難な社会を維持するヒント

になるであろう。

1 スケールの大きな五色の大自然を巡る (図2)

(1) 地球規模の鶴の飛来地・出水を訪ねる

鶴の越冬地は全国各地にある。その中で、北薩摩の北端・出水の干拓地は規模の上で他を抜きんでている。シベリアから中国、朝鮮半島を経由して飛来する1万羽を超えるナベズルをはじめ、マナヅル、クロヅルが大挙して空を舞い、その姿は、北からの便りが届くとの実感である。これほどのスケールをもつ飛来地は他でみないことだろう。

なお、ツルの生態などを詳細に知りたい場合は、出水市ツル博物館クレインパークいずみ(0996638915)があり、訪ねるとよい。

他方、長島町の中央部に行人岳という山がある。標高は394mで、本来、山岳信仰の地であり、修験道の間である。しかし。今ではその頂上は展望公園であり、車で登ることができる。高さからして、眼下に雲海が見られることもあるが、それ以上に素晴らしいのが、3月の出水平野からのツルの飛び立ちである。列をなし、群れをなして上昇気流にのる鶴の北帰行を見ることができ。

鶴といえは、通常は下から見上げることが多い(②)。しかし、黒之瀬戸を渡りながら北帰のために飛び立つ鶴を上から見下ろせば、羽を広げて上昇気流にのり舞い上がる姿は雄大であり、見事である(⑩の上段)。こうした光景は、わが国ではここ行人岳以外に思いあたらない。

北帰行の時期(2、3月)になると、国内外から多くの写真家がシャッターチャンスにと押し寄せる。ただ、期間が限られ、しかも予測が必要なことから、またとない機会をとらえることの幸運を祈らざるをえない。それが自然と向き合う風景街道の宿命であり、当たりはずれの醍醐味でもある。

(2) 東シナ海の荒波が作り出した奇岩を眺め、薩摩西海岸に行く

国道3号を出水から薩摩川内に至る区間のうち、肥薩おれんじ鉄道の阿久根駅から薩摩高城(たき)駅の約20km区間に「牛ノ浜」と呼ぶ海岸④とその延長による「薩摩西海岸」の光景がある(図2)。



⑬ 川内川(薩摩川内市高江町)の長崎堤防



⑭ 国道3号沿いの西方海水浴場(薩摩川内市西方町)

東シナ海に直接面することから、波が荒く、高波の被害もしばしば発生。このため、木組みや石を積み上げて被害を防いだが、その姿が牛の背に似ていたことから牛ノ浜海岸と呼ばれるようになった。

一帯は、シラス台地が海岸に押し出すかのように迫るが、全景を眺めるなら、まずは阿久根市の番所丘公園⑯(江戸時代密貿易を見張る番所があったところ)に登るとよい。黒之瀬戸から薩摩高城まで、あるいは東シナ海および内陸部のシラス台地と、最高峰紫尾山などの山々が眺望できる。

その後に、海岸線に戻れば、無人島で、野生の鹿が住む海水浴場・阿久根大島がある。阿久根港から船でわずか10分であり、快水浴場100選、21世紀に引きつぎたい日本の名松100選の一つである。鹿児島県の鹿児島とは、諸説ある中、野生の鹿が多く生息していたことに由来するともいわれている。さしずめ阿久根大島はそれに通じる光景であり、鹿児島島の由来話をほうふつとさせる。

また、勝本(ウミガメの産卵地)、大川島、牛ノ浜(いずれも阿久根市)の各海水浴場があり、白い砂浜がマリンスプルの海に映えている。

さらに、佐潟の洞窟、人形岩⑱、湯田口洞門、西方海水浴場⑲が要所、要所にあり、砂浜と奇岩が織りなす景勝地である。こうした光景は、アメリカの西海岸、オーストラリアのゴールドコーストに勝るとも劣らないだろう。その意味をこめて「薩摩西海岸」ということができ、目に痛いほどの太陽でキラキラ輝く海辺は爽快感あふれる篤姫ロードが今に伝わる。

(3) 川内川の長崎堤防とラムサール条約登録の蘭牟田池

川内川は、筑後川に次ぐ九州2番目に長い幹線流路長(137km)を持つ。熊本県球磨郡白髪岳(標高1417m)に端を発し、シラス台地を経て薩摩川内市④に流れ出ている。下流こそ比較的緩やかだが、上流は急峻で、狭窄部や屈曲した区間がある。また、多くの支川が合流する。これらから、流域の規模の割にたびたび大水害に見舞われ、住民からは暴れ川と恐れられるほどである。



⑭ 八間川に架かる江之口橋（水門の先が川内川、左手が峰ヶ城跡、高江麓）



⑮ ラムサール条約登録の蘭牟田池（薩摩川内市）



⑯ 甑大明神（鳥居のある岩）と甑明神橋（斜張橋）



⑰ 鹿の子大橋

古くは、続日本書紀記載の天平の洪水（746年）があった。江戸期には、何とか洪水を防ぎたいとの思いから河口部の高江地区に築かれた長崎堤防（1687年）^⑬がある。人柱伝説もあるが、普請奉行・小野仙右衛門が、その流れに沿うように堤防を築いた結果が、約10〜11mと川に突き出した鋸の歯状の石垣堤防（延長640m）である。おかげで、一帯はたびたびの水害から解放され、不毛の地から実り豊かな水田へと様変わりした。

ながれに任せる川づくり。いまでこそヨーロッパから導入された近代河川工法として注目されている。しかし、長崎堤防を生み出した薩摩では、江戸期に既にそうした考えの川づくりがあったことを物語るものである。堤防の傍に仙右衛門翁を顕彰した小野神社があり、その裏手の川岸を下ると「心」と刻んだ石碑がある。仙右衛門の川づくりの執念を掘り込んだものであろうか。

また、この堤防と共に、高江地区の湿地化を避けるために八間川が開削された（1849年）。その八間川が川内川に合流するところに全長17mの江之口橋^⑭がある。また近くに水路橋がかかる。ともに石橋であり、鹿児島市の甲突川の石橋五橋を作ったことで有名な肥後の石工・岩永三五郎（肥後種山（現八代郡東陽村）の出身）の手によるものである。

次に、川内川の上流に15kmさかのぼり、脇道にそれると支川・樋脇川（清色川）となり、武家屋敷で有名な入来（いりき）麓がある（本章2節の②）。そして、さらに上流に遡れば蘭牟田池^⑮（いむたいけ）。薩摩川内市祁答院町）に行きあたる。

蘭牟田の牟田は湿地のことである。豊表の蘭草（イグサ）の刈り取りが行われていたことによる名称であり、火口湖（面積約60ha、標高295m）である。数十万年前の蘭牟田火山の溶岩ドーム群によるカルデラであり、それを飯盛山（蘭牟田富士ともいい、標高432m）が塞いでできた湖である（図3）。ラムサール条約に登録され、多数の泥炭質の浮島があり、国指定の天然記念物・泥炭形成植物群落が見られる。あるいは、ベッコウトンボ（国内希少野生動物種）が生息し、手つかずの自然がある。入来麓を見物するとともに、近くの温泉につかり蘭牟田池を散策すれば、心癒される風景街道となろう。

(4) 長47kmに及ぶ日本一長いシラスの吹上浜

いちき串木野市、日置市、南さつま市の3自治体にまたがる長い、長い弧を描く砂浜・砂丘海岸がある。それが長さ日本一を誇る吹上浜^⑦で、延長47kmに及ぶ。鳥取、遠州灘とともに日本三大砂丘の一つであり、日本の渚百選に選ばれ、東洋のニースと



門口（凱旋門）



ナポレオン岩

⑱ 下甕島の東シナ海側に続く奇岩

もいえ、オーストラリアのゴールドコーストに匹敵する。

吹上浜は、薩摩半島の崩れやすいシラスが流れ出して形成されたものだが、北部のいちき串木野や日置市北部は、シラス台地⑦が海岸近くまで迫ることから比較的幅の狭い砂浜をなす。一方、日置市南部および南さつま市は、北部で浸食された砂が供給されてたまり、幅広い砂丘を形成している。

国道270号を砂浜に沿って10kmほど南下すれば、長い年月を経て海から切り離された海跡湖（薩摩湖、正円池）がある。そのうちの正円池（日置市吹上町）はホテイアオイが水面一杯に覆い尽くす群生地である。冬季は腐敗し、その処理が問題だが、6月頃には、アジサイとともに一斉に青く美しい花を咲かせ、それこそ、その花言葉「揺れる思い」をほうふつとさせ、見事な変身という以外に言葉はない。

(5) 8千万年前の手つかずの大自然を満喫する国定公園「甕島」

川内港、串木野新港から西へ約30〜40km。1時間ほど海路「こしき海道」を行くと、東シナ海に島が浮かぶ甕島（こしきしま）列島に到着する（図2、12）。上甕、中甕、下甕の有人3島と8つの無人島からなる。

「甕」とは難しい字だが、現代では何を意味するか分からない人もいるだろう。上甕島の中甕島より突端の巨石が、コメなどを蒸す土器（これを甕といった）の形をなし、甕大明神⑩としてあがめられているが、このことに由来するネーミングである。

上甕では縄文時代の土器（里遺跡）が発見



⑲ 上甕島、里のトンボロ



⑳ 長目の浜（上甕島）

され、また続日本記に甕島の記述がある。東シナ海の孤島とはいえ、古代から人々が住み着き、薩摩隼人の流れをくむのか、甕隼人と称する地域部族がいたとみることが出来る。平安時代には平家落人の伝説がある。鎌倉時代には、武蔵国府の西側に勢力を上げた日泰氏西党の出といわれる小川氏が代々370年に渡り治めた。

地図を見ると明らかだが、甕島は地形の上で天草島、長島の延長上に並んでいる。つまり、九州を斜めに横断する臼杵・八代構造線があり、九州の地質を北と南に2分し、八代海に出たところで南の甕島方向に向かっていく。そして、その北あるいは西の狭い隣接区域に火山の基盤むき出しの古い地層があり、その上に幾層も砂層、粘土

層が積重なっている。甌島は、こうした地層が海から頭を出したもので、東シナ海に面した西側が高く隆起し、東寄り斜め下に傾きながら海岸線に沿って並んでいる。

約八千万年前の鹿島断崖（日本の地質百選）③や、その姿から門口（凱旋門）、ナポレオン岩などの奇岩⑱がそそり立つ。また、近くの海岸からは草食恐竜ケラトプス（角竜）の化石が見つかるなどし、薩摩川内市鹿島支所（099691412211）に保存・展示されている。

年月をかけてできた我が国の三大トンボロの一つである里町の浜⑲（上甌島）や天然記念物「長目の浜」⑳（上甌島）の大パノラマが各々の展望所から眺望でき、カノコユリの自生が見られる。まさに絶海の孤島であり、自然の手のひらの中で生き、今に暮らす我々は、たまの人生の節目に甌島を訪れ、八千万前にタイムスリップし、手つかずの大自然と向き合うならば、その生涯が一瞬であることに言葉を見失くすであろう。本風景街道ばかりか、地形・地質の上では九州の風景街道最大の見せ場である。

なお、2015年に、甌島は国定公園に指定された。前述のことを踏まえると遅きに失した感があるが、内容は絶海の孤島のままに、島そのものが大自然の博物館をなしている。

以上に述べた「薩摩よりみち風景街道」におけるスケールの大きな五色の自然は時代を越えて不変である。5通りのリンクを繋いで、「五色の自然」に彩られる別天地を、生涯の節目、節目に巡ってはと奨めるものである。



図3 北薩摩に残る主な麓（武家屋敷群）

幸いに、わが国の南西に位置するとはいえ、空港、九州新幹線、九州自動車道・南九州西回り自動車道と高速交通体系が完備。これらから、薩摩よりみち風景街道は、交通の利便性が高く、日常の都市住まいと背中合わせである。休暇や週末などを利用して、非日常性が強い自然をめぐり、都市と北薩摩を往来することである。「どこまでくだおもしろい」。朴訥な隼人の血を引く地元の人々とあいさつを交わしつつ、いつからでも、どこからでも皆さんの訪れを期待している。

2 薩摩藩の武家屋敷群「麓」を訪ねる

（表1および図3）

安土桃山時代、島津氏は九州の平定に挑んだ。しかし、1587年、豊臣秀吉の九

州制庄に屈し、また、1600年の関ヶ原でも負け戦であったが、薩摩、大隅、日向諸県郡に封じ込められたものの安堵され生きのびた。その際、こうした辺境の地を守り、国内だけでなく異国からの守りのための島々を含めて藩内を地区割し、多くの外城や関所、番所を設けて武士を配したこと、全人口の4分の1を超える武士がいたとされる。

(1) 外城制度と武家屋敷群の麓とは

そして、1615年、江戸幕府は「二国一城令」を公布した。そこで、これに対処するために、島津藩は、鹿児島に鶴丸城を構築して本城（これを内城と呼んだ）とし、それ以外の藩内各地にあった外城（多くは小山や丘の上にあった）を全て壊した。その際、中世以来の外城単位の地域割りは原則的に維持し、軍事および行政の上で、領主や地頭が地域を治める制度が新たに工夫された。

地域の数は江戸時代の後半で113ともいわれ、これが外城制度（としようせいで）と呼ばれるものである。換言すれば、見かけの上では一國一城の姿だが、よく見ると、内城とその周りだけの城下町という考えでなく、藩全体が軍事および行政の上で地域ネットワークを構成し、全国に類を見ない巧みな要塞状の藩体制を作り上げた。建造物としての外城そのものはないが、それに代わるものとして、外城があったこれまでの山裾などに「地頭仮屋（地頭館）」が設けられ、それを軍事・地域行政の拠点とし、その周りに武家屋敷群からなる集落（これを麓と称した）がつくられ、藩全体に武士を分散配置した。

この地域自治体のトップは領主または地頭だが、寛永以降、彼らは鹿児島城下町に定住し、必要に応じてやってきては政務に携わった。このことから、麓のことは実質的に「あつかい」、組頭、横目の三役が取り仕切った。あはまとも役のことで、後に郷士年寄と改称、組頭は軍事訓練や郷士の取り締まり、横目は商業、事故、検察などを担当した。また、本城に詰める武士（城下士）に対して、地域（麓）に住む武士たちは、普段は農業を営み、一旦ことがあるときは領主や地頭の指揮のもとに武士として戦う半農半士であった。こうした人々を郷士といい、三役に携わる人々を上級郷士と呼んだ。これは、村あるいは外城の単位を後に郷と称したことに由来している。

要するに、一般的な外城制度は、かつての山城などの廃城、その裾などに設けられた地頭仮屋、それに隣接して整備された武家屋敷群（麓）と、その周りの村や商人町などからなる地域システムのことである。

外城制度には二種類があった。一つは島津一門や重臣による21か所の私領地であり、領主が地頭を兼ねた。天璋院篤姫の実家で有名になった今和泉家（指宿市）や、特攻隊の基地があった知覧の麓（南九州市）は私領地である。いま一つは、島津宗家直轄の外城制度・麓であり、全体の八割以上がこのタイプであった。

ところで、「御仮屋」は、外城制度の拠点であったことから、城山の裾に配されたとはいえ、周辺一帯でやや小高い要所に設けられることが多く、明治時代の改革では、その跡地に小学校あるいは役場といった公共用地に用いられ、現在に伝えられる例が多数見受けられる。

また、郷士のための武家屋敷群をなす麓については、大路（馬場）と小路の組み合わせで、格子状の道路網をなすように見える構図だが、守りを固める意味で、適度に行き止まりや、丁字、筋違いの交差点があった。すなわち、写真②に見るように、石垣の上に生垣を重ねた塀を持つ武家屋敷が並ぶが、その屋敷前は幅広の通りであり、これを「〇〇馬場」と呼び、乗馬や馬術の練習が行われた。

郷士の屋敷は、通りから少し引き込んで各戸毎に門があったり、なかったりするが、ある場合は、腕木門、石柱門、または植栽門が造られた。また、その前後は石垣上に犬楯やお茶の木の生垣をのせて連なる長い塀をなし、いくつかの屋敷が背

表1 北部薩摩地域に残る主な麓

町、市	郷	麓	特徴	麓保存状態	郷士	仮屋敷跡	城跡	その他
長島町	長島	一	麓を設けず、郷士が分散居住	×	1136人	長島町役場	堂崎城	1565年堂崎城を攻略し薩案領
出水市	野田	野田麓	街道に沿って武家屋敷がよく残る。 最大の外城（郷）、武家屋敷群が良く残る	○	396人	野田小学校	亀井山城	感応禪寺（薩摩家1~5代の菩提寺） 石敢当、田の神さあ 諏訪神社
	高尾野	高尾野麓		×	856人	柴引1406番地	高尾野城	
	出水	出水麓		○	2610人	出水小学校	出水城	
阿久根市	阿久根	山下/高松町	阿久根城の麓から高松町に移転（元禄3年）	×	215人	阿久根小学校	阿久根城	
薩摩川内市	入来	入来麓	私領、武家屋敷群が良く残る	○	1080人	入来小学校	清色城	江戸期の漆喰壁土蔵、増田家住宅 北郷家墓所 南方神社、江の口橋（石橋） 新田神社、武内神社 摩崖仏 蘭牟田池 津口番所址 津口番所址、下郷土館（旧和田家） 旧入来邸、南方神社 徳重神社（妙円寺詣り） 薩摩焼の里
	平佐	平佐麓		×	1634人	平佐西小学校		
	隈之城	隈之城麓		△	956人	向田本町	二福城	
	高江	高江麓		△	344人	仮屋橋付近	峰が城	
	高城	高城麓		○	1528人		妹背城	
	水引	宮内麓		△	573人		水引城	
	東郷	東郷麓		×			鶴ヶ岡城	
	樋脇	樋脇麓		○	252戸	旧東郷小学校	樋脇城	
	蘭牟田	蘭牟田麓		×	508人	蘭牟田村役場	蘭牟田城	
	黒木	黒木麓		×	420人	黒木小学校		
	大村	下手麓		×	544人	旧大村小学校	大村古城	
いちき	串木野	串木野麓	武家屋敷群 手打湾に沿うように700m続く武家屋敷群	○	1950人	里小学校	亀城	
	市来	市来麓		×	712人	串木野小学校	串木野城	
串木野市	市来	市来麓	×	1358人	市来支所			
	東市来麓/長里麓		×		鶴丸小学校	鶴丸城		
日置市	伊集院	伊集院麓	×	967人	伊集院小学校			
	美山麓		○					

中合わせの街区構成で、その内側の屋敷間は園路で行き来できる構図であった。

要するに、攻め難く守り易い構造の集落や屋敷のブロック構成である。緑を受けるのではなく、武士と農業の両立で自給自足を目指す武家社会を構築したのが薩摩の外城制度と武家屋敷群からなる麓を拠にした地域ネットワークであり、その意味で、他の藩の城下町を核とする地域の体制とは性質が異なる。

(2) 北薩摩地域の主な麓

本風景街道の北薩摩地域4市1町に残る麓(武家屋敷群)を拾い出せば表1のとおりである。大方は旧来の外城(郷)ごとに麓があり、明治の初期まで続いたことから、その姿や地名だけが残るのでなく、今なお人が住み生活している。

北薩摩地域の麓の中で、出水、入来は、薩摩藩全体で見ても知覧と共に三大武家屋敷といってもよいほど昔の姿がよく残されている。また、甕島の武家屋敷は、島ならではの趣があり独特の雰囲気を感じられる。

以下、風景街道のメインルートとその周辺にある武家屋敷などについて、保存状態や規模などに関わらず、著者が歩き訪ねたところを、個人的印象や感想を含めて紹介しよう。

① 出水市に残る国境の麓

出水郷(現在の出水市)出水市は薩摩藩にとり藩境の要衝の地であった。薩摩街道(国道3号)を水俣から南に下ると篤姫ロード沿いの肥薩の境(出水市下鯖町)に至るが、そこには1600年頃に設けられた「野間之関所」②がであった。薩摩藩三大関所の一つであり、厳しく取り締り、守りを固めた。

「薩摩びと、いかにやいかに、刈萱も とざさぬ御代とは知らずや」



② 野間之関所跡



図4 出水麓の武家屋敷配置図

あまりにも関所の取締りが厳しいことから、高山彦九郎(江戸後期の尊皇思想家)が書き残した一文である。

この野間之関所から国道3号を少し山側に、国道447号を経由してかつての菱刈街道を進むと、九州新幹線の出水駅に遭遇する。そして、その南に米ノ津川があり、それを渡るとさらに平良川が分岐し、これら両者に挟まれた扇状地に存在するのが、有名な「出水の麓」である(図4)。

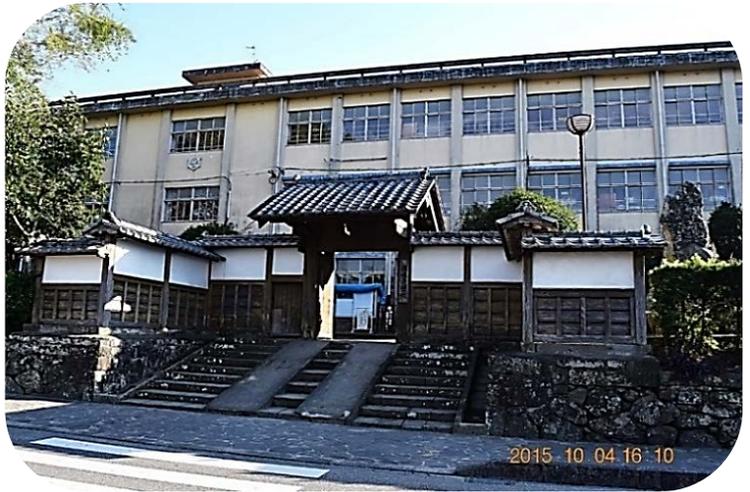
あるいは、国道447号の広瀬橋交差点から県道372号をさつま町方面に少し走ると、本町、出水小学校前という交差点があり、



②③ 武家屋敷税所邸の門と屋敷内の部屋の状況



②② 豎馬場



②④ 今も小学校の校門として使われている出水麓の御仮屋門



②⑤ 1kmも直線的に並ぶ野田麓の武家屋敷

その左側である。一帯は、単に「麓町」と呼ばれているが、要するに御仮屋門が残る出水小学校を指せば迷うことはない。

出水の麓は、NHK大河ドラマ「篤姫」のロケ地である。中世の山城「出水城」があり、その麓の丘陵部に関ヶ原の戦いの前年から30年をかけて武家屋敷が整備された。

2810人という多くの郷土が住み着いて防衛の任に当り、面積は44haと藩内最大規模である。武家屋敷は伝統的建造物群保存地区の選定を受け、保存が進められ、保存・復元状態は極めて良い。

武家屋敷について、公開されている旧税所(さいしよ)邸②を見学すれば、屋敷を守る石垣・生垣の組み合わせ、道路と屋敷地の高低差、武家門と玄関の筋違い、表玄関と内玄関の使い分け、玄関横の屋内で弓の練習ができる高い天井などの工夫がある。その上で、広間を挟む下座敷、次の間、上座敷、奥座敷、跳ね上げ式階段の2階の隠れ部屋と6部屋を数え、居間と表玄関が正面に向きあっている。税所家は麓の要職を務めた上級郷士で、それ相応の広い屋敷に住んでいたことが分かるであろう。

江戸時代の始めに島津義久が帖佐から移設したといわれているが、現在も出水小学

薩摩よりみち① 入来文書と朝河貫一

薩摩川内市の入来地区に伝えられた古文書が、日本の封建制度の特徴を分析する原資料になった。研究者は朝河貫一・エール大学教授(1873~1948)。朝河貫一は、戊辰戦争、会津戦争で朝敵となった福島県二本松出身だが、大隈重信らの支援で、米国留学、欧米と日本の法制史の比較研究に打ち込んだ。

入来には領主館を中心にした武家屋敷群「麓」が現在も残ることで有名だが、古文書も多く保存されていた。なかでも入来院家に関連する文書に朝河教授は注目。10年がかりで読解、研究し、その成果を「ドキュメント・入来」として発表、世界的な注目を集めた。

入来は島津の庄の一部として、京都・近衛家の荘園だったが、鎌倉時代になると幕府から任命された領主・島津家がこの地を支配した。朝河教授は、その土地支配の内容を入来古文書で細かく分析、「日本の封建制度はヨーロッパと同じ土地支配を軸とする封建制度でありながら、その支配のあり方、身分制度がより自由なのが特徴」と結論付けた。

ヨーロッパの土地支配は領主自身が直轄地を持ち、直接支配したため農奴など奴隷的身分制度が必要だった。しかし、日本の領主は、家臣団に農民を監督、徴税したが、直接、農民を身分的に奴隷的に支配する制度はなく、農作業の一切を「百姓」が行っていた。それだけ、百姓の独立性、自由度はヨーロッパより高く、また、刀狩りなどによって武士団と農民が完全に分けられることによって、ヨーロッパに比べ、農民が田畑に関わる自主性は高かったし、武士団が城下に集められたことによって、農民の実質的な自由裁量の幅は大きかった、としている。

朝河教授は積極的な平和主義者としても知られ、日米の和親を願い、太平洋戦争の末期、ルーズベルト米大統領に天皇宛ての親書を書くことを勧め、早期の終戦を働きかけたが、実らなかった。(玉川)



朝河貫一

校の正門として御仮屋門②が残されている。加えて、石垣・生垣の町並み②、宮地邸(NHKロケ地)、庭のみ公開)、三原邸(土日のみ公開)、税所邸②、竹添邸、武宮邸といった公開された武家屋敷がある。庭や屋敷を覗きながらのんびりと馬場通りなどを歩けば、400年の時を超える麓のまちの躍動が目前に迫り、不思議の村にいる気分になるであろう。

次に、出水麓から、肥薩おれんじ鉄道に沿うように国道504号があり、野田郷駅に至れば再び中世の山城跡があり、そこが「野田麓」である。この麓は、県道368号沿いで約1kmにわたり武家門と石垣が定規を当てたようにして並び②⑥、その途中の野田小学校が御仮屋跡である。また、野田駅を挟んで海より「感応禅寺」①①②があるが、これは後述のように、島津宗家初代から5代までが静かに眠るところでもある。

つまり、出水市には2つの武家屋敷が残されている。地区として広がりを持つ大きな規模の出水麓と、街道筋に長々と続く野田麓である。

また、必ずしも風景ポイントでないが、出水市武本に、第三代地頭・山田昌巖（しょうがん）の墓がある。彼は



図5 北薩摩で最も古いといわれる入来麓

島津義弘に仕え、朝鮮出兵や関ヶ原で名を馳せた人物だが、とりわけ青少年教育に熱心で、そのしつけの教えが「出水兵児修養掟」とされている。兵児（へいこ）とは、薩摩では武士の子弟のことであり、15〜25歳の男子である。そうした青少年の教育の



②⑥ 入来家の増田家



武家屋敷



植樹による見事な武家屋敷

②⑦ 今に残る入来麓の武家屋敷

あり方が郷中教育と呼ばれている。郷士の子供たちが、先輩たちで後輩の面倒を見ながら、独特の質実剛健な学風、土風が醸成された教育のことである。むろん、これは出水地域だけのことでない。薩摩藩全体の人材育成のあり方でもあり、薩摩男児の気風を生み出しているが、そのルーツが「出水兵児修養掟」にある。

堅馬場の最奥に前述の御仮屋門を正門とする出水小学校②④があり、その向かいの広場では山田昌巖生誕祭として出水麓祭りが毎年11月に開かれている。それを見物していると、いまだに郷中教育が継承されている思いであった。

参考までに、兵児修養掟の冒頭を紹介すれば、「節義（せつぎ）ただしこと（こと）の嗜み（たしなみ）と申すものは、口に偽りを言はず、身に私を構はず、心直（こころすなお）にして作法乱れず、礼儀正しくして上に諂（へつ）らはず、下を侮（あな）どらず・・・」である。現代でも十分通じよう。

② 薩摩川内市の入来麓、宮内麓および高江麓（図5、9）

出水市に続く長島町は、もともとは天草氏の一族が、天草八氏の一人として海に突き出た堂崎城に居住していた。しかし、1554年、相良氏（人吉）の弾圧に耐えかね、薩州島津家を頼り出水に逃れた。その後、野田郷の島津忠兼が長島を攻略し、これを機に薩摩領となったが、集落としての麓は特に作られず、郷士は城川内を主にし

て村の中に分散居住した。

長島町のとなりのまちは阿久根市。ここも麓が存在した。しかし、もともと小規模で、また一部は移転したなどから、わざわざ訪ねるものは見当たらない。

そして、薩摩川内市に入れば、多くの麓が残る(表1)。その中で最も有名なものが入来(いりき)麓である。また、他の遺跡や施設の回遊に合わせて紹介すれば、新田(にった)神社前の宮内麓や、川内川河口部の長崎堤防近くの高江麓がある。

入来麓は、川内川の支川・樋脇(ひわき)川の沖積地にある古いものである(図5)。鎌倉時代中期に、相模国御家人渋谷定心が惣地頭となり、入来院と称したことに始まる。

当初は清色城(きよしきじょう)があった。しかし、廃城後はその麓に領主館(現在の入来小学校)があり、その前面に武家屋敷⑳(約19ha)が展開した。北半分は中世の面影が残るせいか不整形だが、南半分は整形的な街路網を成す。また、まち全体に緑がよくいきわたり、峠から眺めれば杜の中に静かに佇む趣の麓である。

入来麓の武家屋敷の町並みで独特なのは、木造の武家門に加えて、茅葺の武家屋敷門㉑がみられることである。しかし、残念なことに2015年の台風で倒壊。現在のものはその後復元されたものである。あるいは、茅葺の旧増田家住宅㉒があり、同じ敷地内に大正期の石蔵やその後の浴室便所がある。まるで、時代ごとに建物を追加しモデル展示しているかのようである。

前記以外では、樋脇川の石を使用した玉石垣とその石垣の上に植えられた茶の木や犬槇などの生垣、大手門前の濠や馬場、下門口を備えた御飯屋跡、かつての外城への切り通しなどと多くの史跡・文化財が残されている。麓の中でも、中世、近世にまたがる色彩があり、歴史的価値は極めて高く、よくぞ残ったと感心させられた。

薩摩川内市の中心市街地にもどり、その横を流れる川内川に架かる開戸橋を渡り、川沿いを下流に進めば、新田神社からまっすぐ伸びた参道に至る。この辺一帯を宮内町といい、さらに下れば、銀杏木川の排水機場がある。そして、その近くに見落し



㉘ 薩摩焼窯元が並ぶ美山麓

薩摩よりみち㉚ 薩摩焼の里・美山(みやま・鹿児島県日置市)

薩摩焼の里・美山へは南九州道西回りが開通して、鹿児島市から30分足らず、気軽に行ける「焼き物の里」となった。美山ICで降りて間もなく「沈寿官窯」に出会う。秀吉の朝鮮出兵で連れてこられた陶工約80人が、望郷の思いにかられながら作陶にいそしみ、名品を世に送り出してきた。現在、15代目。

骨太い武家門をくぐって、すぐ歴代・沈寿官の作品が展示された「陶芸館」があり、ギャラリーへと続く。白地に美しい花模様などの伝統的な作品から現代的な15代の作品まで堪能できる。登り窯の横道を登って、作陶風景を見学、足を進めると、司馬遼太郎の「故郷忘れ難く候」の文学碑がある。

2015年は美山窯元祭りの30回目で、国民文化祭の一環として様々なイベントが行われた。薩摩焼窯元のほか、木工、ガラス工芸など工房めぐりや陶遊館での陶芸体験など、石垣と竹林、そして薩摩藩主が泊まった御飯屋跡など「美山を遊ぶ」一日は、四季折々、「見る」「食べる」「体験する」それぞれに楽しい。(玉川)

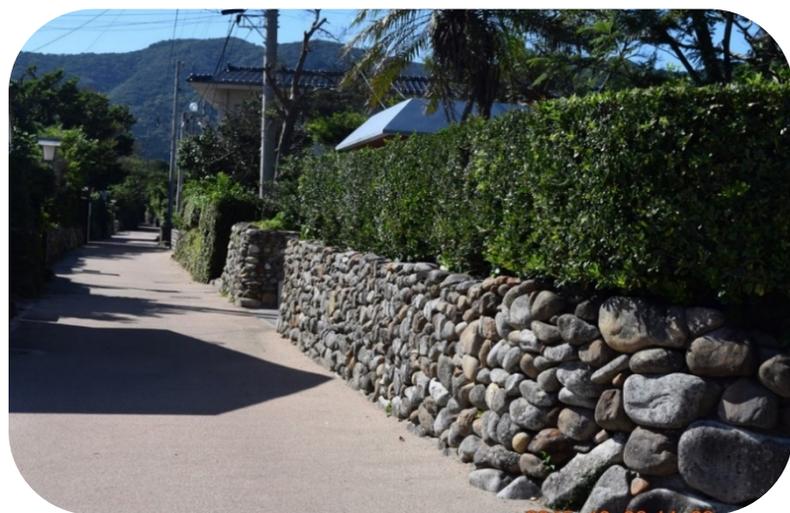


がちな小さい武内神社(新田神社の末社)があり、その前面に伸びる道路沿が宮内麓の武家屋敷群㉙である。規模はさほど大きくはないが、生け垣を主体にして、犬槇による植栽門㉚は、入来のそれに匹敵し、大変素晴らしい造形をなしている。

南九州西回り道の薩摩川内高江インターを下れば県道43号。それを川内川の河口・久見崎に向かうと、ICから1つ目のバス停「高江麓」に至る。そこから高江法隆寺、



⑳ 里（上甌島）の武家屋



㉑ 手打（下甌島）の武家屋

峰山小学校の方向に入った路地沿いが高江麓の武家屋敷である(図9)。小学校は高台にあり、峰ヶ城の跡である。また、石垣と犬楨の生垣による路地に武家屋敷が並び、どちらかといえば、木造の武家門や石垣よりも、生け垣が目立つなどから、宮内麓と同様に、農村的な集落の色彩が強い。

武家屋敷を突き抜けると川内川に流れ込む小さな支川に出る。それをさらに川下に向かえば、先に述べた石橋「江之口橋」(14)に遭遇する。

㉓ 陶工たちの美山麓

いちき串木野市には、市来麓および串木野麓が存在した。共に、その面影が一部に残るところもあるが、現実には、出水や入来のように明確にまとまった武家屋敷はない。日置市の伊集院麓も同様である。地頭飯屋の門が伊集院小学校から個人住宅に移され、再び元に戻されるなど変遷した。また、武家屋敷は大光寺裏の路地にそれらしい雰囲気が残るに過ぎない。

これらの麓の消滅は、鹿児島市のベッタタウンとして市街化が進み、まちの変化が

激しかったことによるものである。逆に言えば、麓が都市に飲み込まれる実態が読み取れる。

ただ、伊集院麓で留意することは、必ずしも独立した麓ではないが、美山麓㉒が存在することである。地頭飯屋は伊集院麓にあったものの、武家門や石垣と生垣による形の整った屋敷をいまなお見ることが出来る。これは、文禄・慶長の役で朝鮮から連れてこられた陶工たちの窯元であり、陶工を郷士として厚遇したことによる。以来、四百年に及び、12の窯元が薩摩焼の火を守り続けている。毎年11月になると美山窯元祭がある。「さつま焼の郷」を見る傍ら、寄り道する価値は十分にあり、歴史の証人を見るとき立ち寄ることをお奨めする。

㉔ 甌島の武家屋敷(図12)

甌島は、鎌倉時代には小川氏が治め、亀城を築いたが、1595年に日置郡田布施(南さつま市)に移封された。その後、江戸時代になると、島津藩が直轄地として治めることとなり、外城制度の枠のもとに、里、中甌、手打に地頭飯屋が置かれ、上甌島の里、下甌島の手打ちに郷士が住む麓が築かれた。

上甌では、亀城の裾で、現在の里小学校の位置に地頭飯屋あったが、それを拠点にして麓㉒が形成され、島の村々を治めるとともに、海路を往来する船の監視を行った。下甌島の手打では、現在の市役所下甌支所の位置に地頭飯屋があり、また出入りする船舶を調べる津口番所が置かれたが、写真㉑に見るように、手打湾に沿って湾曲した通りに沿った麓が形成された。

これらの麓は今も残るが、海岸などで容易にえられる大き目の丸石を用いて、高さ1〜2mほどにきれいに積み重ねて石垣をつくり、その上の生け垣として、犬楨だけでなく、ウバメガシなど島の樹木が利用されている。中にはソテツやカノコユリなどがどこどころから顔を出し、開花の時期になると、本土とは違って、南国らしさを醸し出している。また、出水や入来などに見るような厳格な門は見られず、屋敷内の家屋は当時のものとはいえないものの、南国沖縄風の寄棟が多く見られる。

三 文明を築いたそれぞれの薩摩のまちを行く

先に紹介したように、九州の南に位置する薩摩には、ヤマトより早い段階から単人と呼ぶ人々が住み、暮らしを立ててきた。そのせいか天孫降臨に関わるビックな話があり、埋め尽くすように連なる山から山の風景をながめていると、さもあらんと

いにひたることもある。

一方、山田昌巖の「出水兵児修養徒」でないが、類するものに薩摩男子の気質を表す「薩摩兵児謡（薩摩ブニセうた）」がある。いつ頃からかは不明だが、宴席などでよく歌われている。その1節を紹介すればつぎのとおりである。

「おどま薩州 薩摩のぶにせ 色は黒くてよこばいのこじつくい
 今じゃこげんして からいもどん くちちよどんやがちや
 天下のご意見番じゃ そんなときやワイドンも
 オイげえこんか オイげえこんか」

あるいは、薩摩言葉は、当然ながら薩摩の暮らしの中で生まれたが、同じ九州に住んでいても大変分かり難い。「コケオジャタモンセ」「アガイヤッタモンセ」。前者は

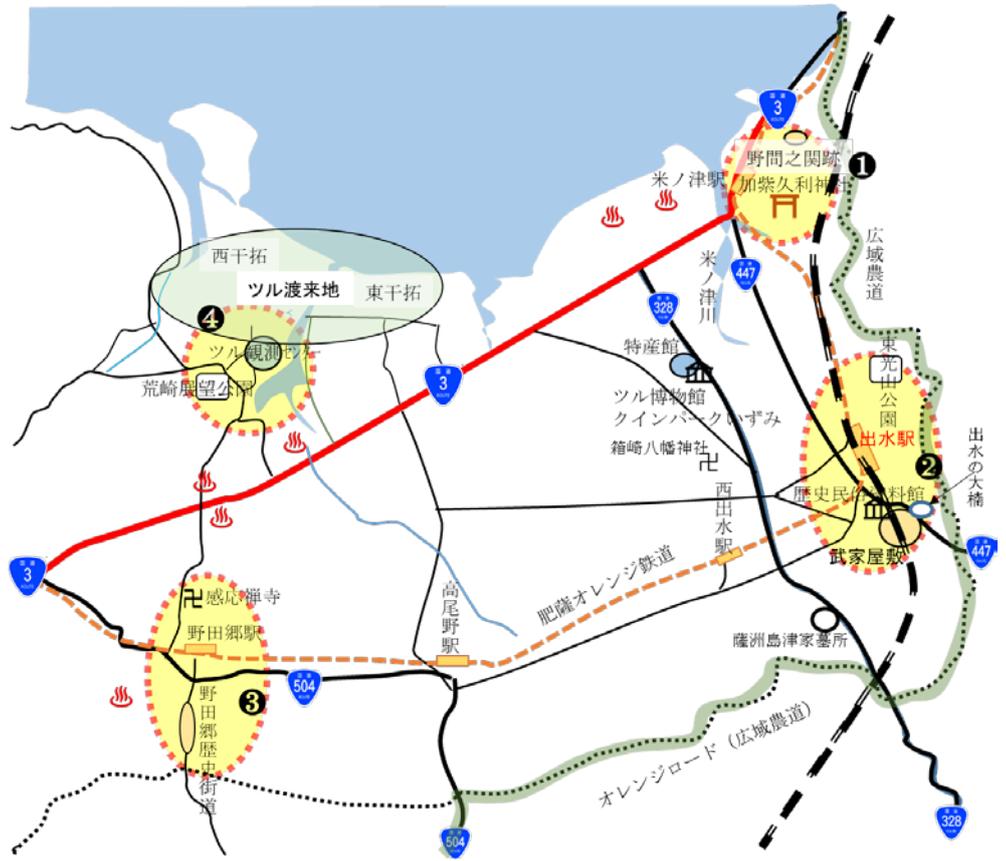


図6 季節で異なるツルの里・出水の回遊



③-1 夕日沈むツルの渡来地出水平野(東光山公園より)



③-2 感応禅寺の仁王門

「こちらにおいてください」、後者は「お召し上がりください、お上がりください」とのことである。

甕島では地形が厳しく、交通を船に頼ったことから、対岸とは交流できても、島の中央の山で背中合わせである集落との行き来はほとんどなかった。このため、集落ごとも言葉が異なり、お互いに通じにくいとのことである。

こうしたことを並べたてると、薩摩には前章に述べたこと以外にもそれぞれの地域で特異な出来事や風習、遺跡、文化があり、気質があることが容易に推察できる。そこで、「いずみ」、「せんだい」、「こしき」の3地区で構成される北薩摩地区において、それら固有の風景ポイントを加えながら、以下ではまちや地域の巡りを紹介しよう。

「薩摩をゆうと見てくいやんせ」である。

1 季節で異なる「いずみ地区」の回遊

(1) 特別天然記念物のツルと薩州島津の里・出水を巡る

図6は、いずみ地区の出水市における主要な風景ポイントを網羅したものである。その中で、前章までに述べた諸内容に加え、出水駅近くの山手に東光山(とうこうざ)

ん。標高160m)公園が加えられている。これは、写真①1に見るように、出水の市街地および出水平野を一望するのに好都合なことによる。

ところで、ツルの飛来は、いうまでもなく10月〜3月の越冬期である。したがって、ツル博物館があるとはいえ、この期間と、それ以外で出水市内の回遊は異ならざるをえない。当然ながら、春、夏は、二章の第2節に紹介した出水麓、野田麓の武家屋敷を主にした回遊となり、これらに追加するのが加紫久利神社と、薩州島津家墓所、

薩摩よりみち③ ツルと生きる—人の温かさや気候の暖かさを求めて

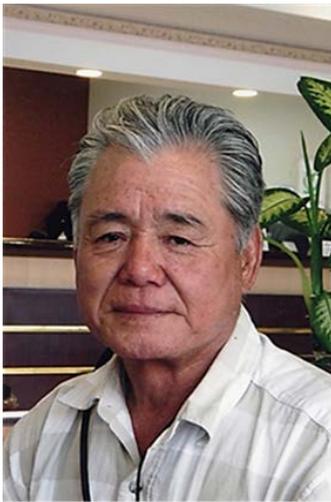
出水平野には、1万羽を越えるツルたちが、遠いシベリアから冬を過ごしに飛んでくる。ナベツル、カナダツル、黒ツルのほか、丹頂ツルや迷鳥のアネハツルも交じっている。羽を広げ、低く滑空し、また高く舞い上がるツルの群れは、世界にどこにもない風景だ。

ツルたちを呼び寄せたのは、鹿児島島の気温の暖かさ、広々とした干拓地に魅せられたのだろうが、何より出水の人々の「温かさ」だろう。最初、阿久根に飛来したツルは、隣の出水の干拓地に「ねぐら」を移し始めた。当時飛来してくるツルは約千羽程度。終戦直後には、進駐軍の米兵がレジヤードわりのハンチングでツルを撃っていた。地元にとっても、農作物を食い荒らすツルは迷惑鳥であった。

ツルの数も次第に増え、昭和27年、国の特別天然記念物第1号に指定された。地元でも「せつかく渡ってくるツルに「ねぐら」を造ってやろう」の声が上がりが始めた。「農作物の被害を減らすため、餌も与えよう」。そんな保護運動の先頭に立ったのが岡田孫一さん。初代のツル監視人となった人だ。現在は3代目・時宗秀次さん。ツルが飛来する10月末から北帰行の3月まで監視所に常駐して、ツルの餌やりなど世話を続けている。

時宗さんたちの心配は、飛来の途中で、鳥インフルエンザにかかり死ぬツルが時々いることだ。感染が広がれば、養鶏場の鶏の大量処分などにつながるだけに鶴の観察は気が抜けない。

ツルの保護の為に、越冬地を各地に分散させることも検討されている。薩摩よりみち風景街道の目の玉風景になります。同時に鶴への理解を深めてほしい」と時宗さんは願っている。(玉川)



ツル監視人・時宗秀次氏

箱崎八幡神社、感応禅寺である。

野間之関所④近くに加紫久利神社(米ノ津)がある。これは薩摩一の宮ともいわれ、由緒ある神社だが、西南戦争で全焼した。その後、最近になり復活し改築されたもので、薩摩にあつて歴史を刻み、語り継ぐ神社の一つである。

一方、箱崎八幡神社および感応禅寺①、2、薩州島津家墓所はいずれも島津氏に関する神社である。その中では、感応禅寺は、島津宗家初代忠久が創建(1194年)したもので、日本最古の禅寺といわれている。ただ、このことは、「扶桑最初禅窟」(後鳥羽上皇の宸筆)の額がかかる福岡市博多区の聖福寺(1195年)と競うことになり、断定はできない。

また、箱崎八幡神社は、福岡市東区の菅崎宮に同名である。これは、島津の始祖・忠久が、鎌倉から出水の野田へ下向の際、筑前博多沖で時化に合って遭難しかかったものの、菅崎宮に請願し難を逃れた。このことにむくいるため建立したものである。現在は日本一の大鈴(高さ4m、直径3.4m)があることで知られている。薩州島津家は、室町時代から安土桃山時代にかけて存在した島津家の分家で、一時出水城に入り薩摩守と号を称した一族の墓所である。このように見れば、出水平野は、薩摩の北部の中でも島津家のルーツとして絞り込まれる地区である。また、薩摩と鎌倉を往来した島津家と博多の関係が極めて強い。

以上の諸内容をもとにすると、夏季はオレンジロードと国道504号に沿った道路が回遊の基軸である。冬季は、これに出水平野のツル飛来地の観察が追加され、このための回遊路は、図6で明らかかなように、国道3号を含むループ型となる。あるいは、出水は四季折々の花をさかせるところが多い。その中で規模が大きな所を拾いだせば、桜の名所(特攻碑公園、東光山公園)や、蓮の名所(ツル観察センター近く)がある。あるいは、郊外に足をのばせば、菜の花(上場高原)、あじさい(東雲の里あじさい峡)、コスモス(上場高原)がある。各々の開花期にこれらを追加して

表2 薩摩よりみち地域の長大橋一覧

	橋名	位置等	橋長m	形式	建設年
長島町	黒之瀬戸大橋	国道389号阿久根市・長島町	502、MX支間300	鋼トラス	1974
	伊唐大橋	農免農道 長島・伊唐島	675、MX支間260	PC斜張橋	1996
	竹島大橋	長島町鷹巣	295	桁橋	1996
	赤崎橋	長島町、県道47号	292	桁橋	1997
甕島	川内河口大橋	薩摩川内市久見崎	631		1981
	甕大明神橋	県道351号・上甕町中甕	420	斜張橋	1993
				単純PC	
				連続斜張橋	
	鹿の子大橋	県道351号・上甕町平良	240	連続アーチ	1990
1533			PC連続箱桁橋	2020	
甕島	甕大橋	第1橋	207	PC3径間	
		第2橋	550	PC4径間	
		第3橋	383	PC4径間	
		第4橋	383	PC4径間	

訪れることも一興であり、文字通り花を添える風景の道となる。

(2) 天草・北薩の眺望と古墳だらけの長島に寄り道する

続く、阿久根市とその周辺については二章第1節で述べた。これに長島町を加えれば図7のとおりである。メインロードの国道3号から阿久根市・多田交差点で国道389号へと分岐。「ながしまロード」と愛称を付けた道を進めば、約10分で黒之瀬戸大橋⑨に至る。これを渡ったところが長島町だ。

黒之瀬戸（幅500m、長さ4km）は、九州にあって早鞆、針尾、早崎などと並ぶ急流の瀬戸であり、渦潮を見ることが出来る。また、長島は、本来、他の島々と同じく肥後国天草郡であった。しかし、戦国時代に薩州家島津の島津忠兼が堂崎城を攻め、以来薩摩国出水郡に属している。長島諸島とも呼ばれ、30近い島々からなるが、長島（本島）と伊唐島、獅子島、諸浦島の4島のみが有人で、他は無人島である。

現在では、獅子島を除けば、長島と他の有人島との間に長大橋が架けられており、主なものを表2に示す。最初に建設されたのが、黒之瀬戸大橋（502m）である。天草五橋から8年おくれの1974年の開通。黒之瀬戸の景観に配慮した濃青色の鋼トラス橋が架かっている。

次いで、長島と伊唐島を結ぶ伊唐島大橋（PC斜張橋。橋長675m）⑳-1が19



図7 黒之瀬戸を渡り長島町を周回する



⑳-1 伊唐島大橋（長島～伊唐島）



⑳-2 行人岳から天草、九州本島を眺望する

96年に農道として開通。長島で最も長大な橋である。また、同時期に竹島大橋（295m、PC桁橋）が開通。これらが、島の農業、漁業の発展に大きく寄与していることはいうまでもない。

なお、黒之瀬戸大橋をわたったところに、道の駅「だんだん市場」があり、これに付随するかのようには、高台に登れば「うずしおパーク」がある（図7）。黒之瀬戸海峡および大橋⑨が一望でき、万葉の歌碑があり、一章2節に紹介したとおりである。

長島の中程にある行人岳や毎床風車公園に上れば島全体は当然ながら、遠く八代海、九州本土が眺望できる。そして、長島の突端に針尾公園⑤があり、そこからは、伊唐島、同大橋、竹島、同大橋、諸浦島、乳ノ瀬橋といった諸風景に加えて、天草、九州本土が一望でき、まさに絶景ポイントである。

長島に長大橋が架かる遙か以前から人々は島に住み暮らしてきた。このことから、島には5世紀から7世紀にかけての古墳が200基以上ある。その中で、堂崎城の近くにあり、ながしまロードから遠くない位置にある3か所を取り上げれば、小浜崎、明神および指江古墳が薦めである。

小浜崎古墳は、直径10m以上に及ぶ円墳や石塚からなり、長島で最も古いといわれている。明神古墳は約30基の群集墳であり、指江古墳は約140基に及ぶ。これ

らと登城口の石段が残る堂崎城を巡れば、長島の古代、中世の遺跡巡りができる。黒之瀬戸に遮られながらも、小さな島に、いつ、どこから人がやってきて、どんな暮らしをしていたのか想像するだけでも不思議に思え、興味がそそられよう。

なお、長島のおよその規模を知るため、主要地点間の距離を図7に付記した。メインとして長島ロード(国道389号、県道47号、379号)が循環する中で、各ルートとの距離はせいぜい十数kmであり、車で走るだけならば20分程度である。あるいは、一周しても約1時間だ。山を登ったり、下ったりしながらも一日かけてのスロードライブで、島の主要箇所全てを訪れることができる。いわば、道の整備が進み、花壇の花植えも活発であり、さらに車の交通量はさほど多くない。これらのことから、カーツーリズムを堪能するのに都合が良い長島である。

2 北薩の中心地「せんだい地区」は歴史の宝庫だ

(1) 阿久根の海岸線をひたすら走る

長島から阿久根に戻ると、内陸側は北薩摩で最も高い標高1067mの紫尾山が聳え、山から山が続き、それらが海に迫る地形を成している。このため、九州新幹線は出水駅から川内駅までほとんどがトンネルである。最も長い第三紫尾山トンネルに至っては全長10kmに及ぶ。これから、本地域は、篤姫ロードにしても、地域資源の分布にしても全てが海岸線に集中し、二章1節の(2)に紹介した通りである。

ただ、そうした中で付け加えれば、阿久根にも旅を楽しむいくつかの仕掛けが可能である。阿久根市のホームページからの引用だが、阿久根は平安時代からの荘園で、任命された院司(神崎太郎成兼)が英祢院(あくねいん)と名乗ったことに由来するといわれている。その「あく」は魚、漁業を意味し、「ね」は岩礁のことである。漁業のまちとして栄え、鎌倉時代は「莫祢」と表記された。そして15世紀中頃、島津用久(薩洲島津家初代当主)により阿久根と改められ、莫祢氏は島津藩の家老となった。

要するに阿久根は、陸海の交通の結節点である。延喜式の宿駅「英禰」だが、その状況はいまも引き継がれている。あるいは、アジ、イワシ、サバなどの新鮮さが売りものの魚介類の水揚げが盛んなまちであり、このことを自慢するものが、漁協直営のあくね新鮮朝市(毎月第2日曜日)や食堂「ぶえん館」の行列のできる賑わいである。店員の説明では、「ぶえん」とは「無塩」のことで、塩をふる必要がないほど新鮮との意味であると教えられた。



図8 薩摩の西海岸をドライブする

阿久根新港に直結するように肥薩おれんじ鉄道の阿久根駅^{③⑥}があるが、単なる駅の機能だけではない。市の施設「にぎわいの交流館」が併設され、さまざまな催しが行われ、書店、展示コーナー、カフェ、食堂などが付設されている。

また、道の駅「阿久根」^{③⑦}も風変わりである。国道3号と海岸のわずかばかりの狭い土地に、へばりつくように細長い建物があり、海の家かと思える造りである。疲れれば、通りすがりに遭遇する阿久根温泉、川内高城温泉（湯田温泉）につかることであり、飲食店がことのほか多い阿久根市の中心市街地を覗きながらのまち歩きも面白い。

阿久根市は、出水市・長島町と薩摩川内市の中間である。江戸時代、頼山陽が薩摩西海岸を旅し、詩をつくり残している。肥薩おれんじ鉄道牛の浜駅近くにある詩碑「阿嶋峰」だが、

「危礁亂立大瀉間 決皆西南不見山 鶺鴒低迷帆影没 天連水処是臺灣」
 （危礁（きししょう）乱立す大瀉（だいたう）の間 皆（まなじり）を西南に 決すれども山を見ず 鶺鴒（こつえい）は低迷し帆影は没す 天、水に連なる処これ台湾）

とある。当時は歩いて、現代は車での違いはあるが、海辺で眺める風景が変わりはく、休憩しながらのドライブに適している。前述の諸施設を利用し、各人の旅を楽しむことが、東シナ海を眺めての現代の頼山陽の道であろう。

(2) 神話に始まる川内川河口域を周回する (図9)

薩摩川内市は人口約10万である。北薩摩地域の中心都市だが、かつては都市展開の軸は川内川にあった。つまり、川内のまちは、土地利用にしても、都市機能の拡大にしても、支川を含む川内川に沿うことが基本であった。このことから風景ポイントも必然的に川沿いに並ぶが、図9を参照しながら、主なものを時代順に紹介すれば次のとおりである。

a 川内川から伸びる参道の先の可愛山陵と新田神社 (宮内町) ^{③⑦}

薩摩川内市に可愛山陵（えのみささぎ）と呼ぶ陵墓がある。辻榎は合わないままに、あくまでも日本書紀などで様々に語られる神話として著者自身の解釈で述べれば、瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が高千穂の峰に降り立ち、吾田の長屋の笠狭の碕に出てそこから海路を北上し、千台（川内の由来といわれている）ともいわれる高殿（うてな）が築かれ、陵墓はそこに居ついた瓊瓊杵尊の崩御後の墓とされている。神代三山陵（他の2つは霧島市の高尾山上陵、



③⑦ 新田神社と可愛山陵（薩摩川内市宮内町）



図9 川内川河口域を周回する

鹿屋市の吾平山上陵)の一つとされ、神亀山(しんぎざん。標高70m)の新田神社に隣り合わせにあり、宮内庁の職員が常駐し、その下で管理されている。
 新田(にった)神社は、瓊瓊杵尊を主祭神とする「薩摩一の宮」であるが、「新田」とは、瓊瓊杵尊が川内川から水を引いて新たに田をつくったとの意味が込められているともいわれている。

川内川の堤防近くに新田神社の一の鳥居がある。そこから北へ真つ直ぐ伸びた参道(八丁馬場)があり、桜の並木でもあり、春先には市民憩いの花見で賑わっている。この参道を約700m北へ進めば県道44号と交わり、二の鳥居があり、その先の忍穂井川(銀杏木川)を渡ったところに大小二つが連なる見事な太鼓石橋の降来橋³⁸が架かかっている。そこから階段なす参道を上れば新田神社と可愛山稜に達し、お参りができる。また、降来橋は、両サイドが車道で挟まれ、車で神社へ上る参道へと続くが、それらを含めて全体としても優れたデザインと感心させられる。

加えて、参道の近くの武内神社前の通りが二章二節に紹介した宮内麓の武家屋敷群³⁹である。

b 薩摩国分寺跡公園(国分寺町)

律令時代には、薩摩国の国府は川内に置かれ、先に述べたように、大伴家持が薩摩守として赴任したことで知られている。また、国府の左隣に国分寺が建造され、それが現在の国分寺跡公園である。国分寺跡からの出土品は、国分寺跡公園の近くの川内歴史資料館(中郷、Tel 0996-201234)に展示され、また、薩摩藩がかつて久見崎の港で和船をつくっていた時の設計図、文書などの貴重な資料や復元模型が展示されている。

c 島津義久が豊臣秀吉と会見した泰平寺(大小路町)⁴⁰

九州の平定をもくろんだ島津は、幾度となく九州各地を攻めたてたが、20万の大軍を率いた豊臣秀吉のもとに屈した。島津義久は降伏し、豊臣秀吉が御座所とした泰平寺で会見。その時の講和の印である「和睦の石」が寺に隣接した泰平寺公園の片隅に残されている。なお、この由緒ある寺は、708年の創立といわれているが、寛政7年の火災で焼失し、また明治2年の廃仏毀釈で破壊された。現在のものは、1923年の再建である。

d 高江麓の武家屋敷、長崎堤防³³など(高江町)

これらも二章二節に述べた。尊い犠牲の上に長崎堤防が築かれ、八間川の水路を整備するなど大変な苦難があったが、今では見事に稲穂垂れる高江の水田である。このことを思い、川とその周辺を眺望するとよい。また、河口に至れば、久見崎に至り、



³⁹ 宮内麓



³⁸ 新降来橋(太鼓橋、1892年架け替え)と旧降来橋



⁴⁰ 豊臣秀吉と島津義久の和睦の像(泰平寺公園入口)および泰平寺





④ 寺山いこいの広場から眺めた川内市の中心市街とおよび川内川

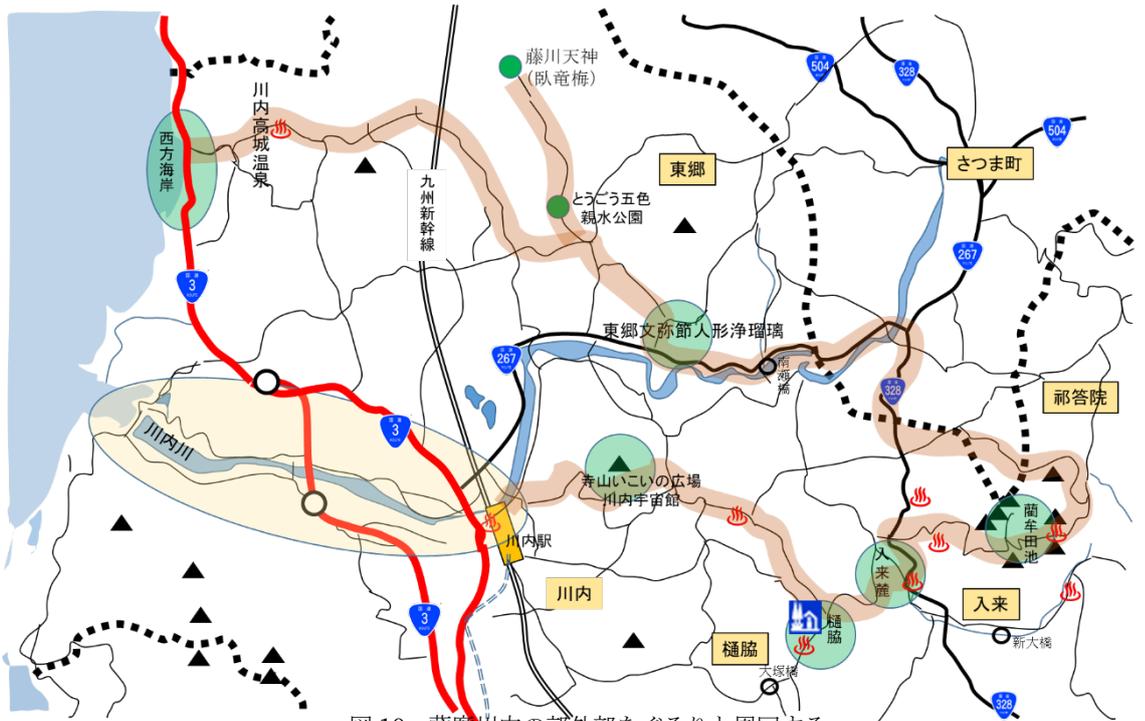


図10 薩摩川内の郊外部をぐるりと周回する

本発電所は、2011年3月の東日本大震災に際し発生した福島の原子力発電所の事故以来、2015年9月にわが国で初めて再開された原子力発電所である。実物大の原子炉模型などを備えた展示館がある。見学するもよく、今後のエネルギー策や環境問題を考える契機になるだろう。

以上に加え、川内駅から車で20分ほど東にいった上床山(寺山ともいう。標高310m)の頂上に寺山いこいの広場(天辰町)があり、車で登ることができる。そこから、川内川およびその流域に広がる市街地④が一望され、お薦めの風景ポイントである。

これを含め、先に紹介した諸施設が配される川内川河口域は、図9に示すように、国道3号に加え、南九州西回り自動車道、川内港へのアクセス道と川内河口大橋が整備され、周回が容易である。

(3) 薩摩川内市の郊外を周回する

甌島を別にして、薩摩川内市の地形をみれば、周辺が小高い山々で囲われ、その中央を川内川が流れ、中下流域に中心市街地が広がる構図である(図10)。このため、郊外部はそれぞれの小山の山裾や谷間だが、風景街道の観点で見れば、入来や蘭牟田池に加え、各々にまとまる光景と地域資源がある。それらを周回するとの観点で整理すれば図10のとおりであるが、共通点は、それぞれに趣ある温泉がある。また、川内川の支川が多く、そこに、多くの石橋がかかる。これらを踏まえ、これまで説明しなかった点を追加すれば次のとおりである。

a 川内高城温泉(湯田町)

川内の市街地からわずか1.2km。西方駅からバスで15分のところだが、湯田川沿

e 薩摩戦国村(湯島町)

藩政時代に造船所、軍港があったところである。

戦国時代の薩摩を主体にした歴史テーマパークである。広さ10000坪の本格的な庭園の中に武家屋敷や町人長屋が並び、また甲冑をつくる工房がある。

f 川内原子力発電所、同展示館(久見崎町)



④ 新大橋（橋長 24.7m）（左）と南瀬橋（橋長 17m、東郷町南瀬、山田川）（右）

いのみどり豊かな山間のひなびた温泉である。ぬるぬるの源泉かけながしが有名で、文字通りの湯治場だ。日本名湯百選に選ばれ、西郷隆盛も逗留し兎狩りに興じた。

b 東郷町地区

東郷町地区は、先に述べたように、約300年にわたり伝承されてきた東郷文弥節人形浄瑠璃（国指定無形民俗文化財）の里である。国内で4か所のみに伝わるうちの1つで、大変貴重なものだ。毎年1月と7月に東郷公民館（096614210053）で演じられている。

東郷の田梅川に沿う県道46号をのぼると藤川天神がある。菅原神社と呼ばれ、菅原道真公を祀るが、もともと太宰府天満宮（福岡県太宰府市）の荘園「安楽寺領」であり、勧請された神社である。境内には見事な臥竜梅（国指定天然記念物）がある。また、上野公園の西郷隆盛の像に愛犬ツンが寄り添うが、その故郷でもある。神社境内にツンの像があり、東郷町藤川原地区の農家で飼われていたものを譲り受けたいわれている。

藤川天神からすこし下ったところは、「とうとう五色親水公園」で、夏場はキャンプ場として賑わっている。また、国道267号をさつま町方向に進み倉野橋を500mほど過ぎれば、南瀬で川内川の支流があり、そこに石橋・南瀬橋（のうぜ（ななせ））ばし。橋長17m、建設年不詳）④が架かる。単円の比較的薄いアーチだが、形がきれいな点で特色がある。川のせせらぎを聞きながら一休みするのもよいだろう。

c 樋脇町地区

自然豊かな中に市比野温泉がある。与謝野晶子・鉄幹も訪れたとのことだ。

「水鳴れば谷かと思ひ 遠き灯の見ゆれば 原と思ふ 湯場の夜」（与謝野晶子）

近くに倉野磨崖仏（鎌倉時代の仏像、梵字）、藤本の滝がある。また、近くの県道36号を少し入ったところには太鼓アーチ型をした大塚橋が架かっている。

ついでながら、入来にもきれいな姿の石橋がある。国道328号を入来支所から約2km下り、県道42号を祁答院の方に1.3km進んだところの脇道に珍しく眼鏡型をした新大橋（しんだいばし）。入来町浦之名、後川内川）④が架かる。これは1909年の架橋で、国の登録有形文化財である。

3 鹿児島市郊外のいちき串木野市、日置市の伊集院町に行く

いちき串木野市および日置市の東市来町や伊集院町の1帯は、薩摩よりみち風景街道の「せんだい地区」に含まれるものの、薩摩川内市とは山を挟んで隔たり、他方では県都・鹿児島市と田上や松元の山々を抜けてつながっている。また、地域全体としてシラス台地などで覆われるものの、国道3号およびJR鹿児島本線に沿うように細長く都市開発が進み、鹿児島都市圏の郊外といった性格が強い。あるいは、前述のように、都市化で北薩摩にみる麓の性格はほとんどが消滅したといつてよい。これらから、風景街道としての意味が薩摩川内市などと大きく異なる。

a 薩摩スチューデントが旅立った串木野市に行く

いちき串木野市とは長い市名だが、これはかつての日置郡市来町と串木野市が合併したことにより市名を重ねたことに由来する。鹿児島都市圏にあつて、古くからの遠洋漁業のまちであり、海に開かれた港まちで、それを象徴するものが徐福伝説であり、幕末の英国留學生の派遣である。

前者は、全国各地の徐福伝説の一つだが、霊峰冠岳（かんむりだけ）に不老不死の薬草があるとしてわが国で最初に上陸したところと信じられている。冠岳は、薩摩川内市との市境の山が西岳、中岳、東岳と連なる中で、最も高い標高516mの西岳のことである。古代山岳仏教発祥の地といわれ、頂上が冠の形をしていることに由来するネーミングである。その山腹に、石造として日本一の徐福像のある冠岳展望公園④、冠岳花川砂防公園が整備され、中国式の庭園（冠嶽園）④や建物（望嶽亭）、散策路などがつくられ、まるでそこに徐福の子孫が住み着いているかのように中国をモチーフにしたテーマパークをなしている。

後者は、薩英戦争で西欧の優れた文化や技術に学ぶことが必要であるとして、1865年（元治二年）、薩摩藩の若者19名を、近代日本の礎を築くため英国へと密航た

せたことである。その中の一人、長澤鼎（かなえ）（密航のために藩主から与えられた偽名で、本名は磯永彦輔）^{④⑤}は、英国で学んだ後にアメリカに渡り、カリフォルニアのワイン王と呼ばれたほどに成功した。アメリカのレーガン大統領（第40代）が、来日（1983年）した際に国会で演説し、わざわざカリフォルニアワインの功労者として名前をあげ、感謝の言葉を述べたことで彼の名が広く知られた。JR鹿児島中央駅前の広場に「若き薩摩の群像」の銅像がある。五代友厚（大阪経済界の重鎮）、町田久成（東京国立博物館の初代館長）、村橋久成（開拓使麦酒醸造所の設立に関わる）、森有礼（初代文部大臣、一橋大学創設）などの面々がいるが、そうした中の最年少（当時13歳）が長澤鼎である。

若者たちが旅立った羽島（いちき串木野市）に、2014年、その功績をたたえるため薩摩英国留学生記念館^⑥が建設された。場所は、約2か月間潜伏の後に、トーマス・グラバーが用立てた機帆船オースタライエン号に沖合で乗り込むため出航した記

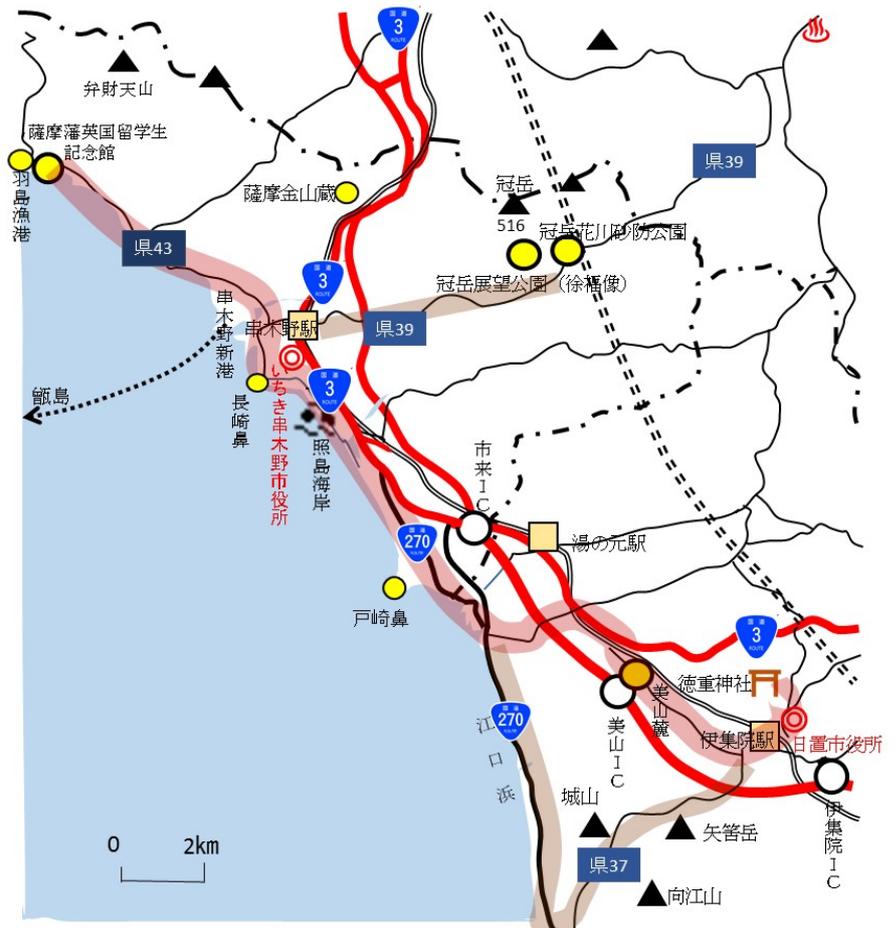


図 11 いちき串木野市と日置市東市来町、伊集院町に行く



④ 中国式庭園・冠嶽園（かんがくえん）



③ 徐福像と冠岳（左の山）

念の地である。また、隣接する浜中港（羽島漁港）の岸壁にも記念碑があるが、その石積防波堤は、薩摩藩が近くの萬福池工事を行った際に余った玉石を使ったといわれている。「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」の一つである。

県道43号に沿って羽島を南に下れば、串木野港であり、長崎鼻、照島海岸となる。この辺りは吹上浜の北端とみなされている。長崎鼻の次の岬・戸崎鼻に立って振り返ると、照島海岸方面はきれいなシラスによる砂浜の景観である。一方、南の江口漁港の先を眺めると、切り立つシラスの絶壁^⑦がある。

b 日置市東市来町地区、伊集院町地区に行く
日置市の東市来町や伊集院町は、同市に



⑤ 英国に留学した薩摩藩の若者たち（手前の少年が長澤鼎）

あつては北端だが、鹿児島市のベツトタウンとして急速に市街地開発が進んだところで、市役所もそこにある。以下、これらの地を行く風景街道を述べるが、県道43、国道3、270号を北から南へ下るとの設定で記している(図11参照)。

羽島港から少し下れば、古くは宮倉(国の米倉)が置かれた伊集院のまちがある。ここでは先に述べた美山麓あるいは「さつま焼の郷」があり、また徳重神社④を風景ポイントに加えることができる。

つまり、1600年の関ヶ原の戦いで、西軍方についた薩摩藩の島津義弘は負け戦となった。この時の退却に際し、決死の覚悟で敵陣の正面突破策にでたが、それが成功し、「島津の退き口」と呼ばれ名を馳せた。

その後、島津は領土安堵となり、義弘は加治木に隠居し、人生を全うした。その菩提寺が日置市伊集院町におけるかつての妙円寺である。このことから、鹿児島城下の武士たちが往時の苦難をしのび、いつとはなしに「妙円寺詣り」を行うようになった。しかし、明治の廃仏毀釈により妙円寺は破壊され、建立された徳重神社④のご神体として義弘の木造が祀られ、いまでは徳重神社の祭事として妙円寺参りが続けられている。

毎年10月の早朝、鹿児島市の照国神社から日置市の徳重神社まで武者姿などで行列などして約40kmを歩く祭である。青少年の心身の鍛錬を兼ねる行事であり、県内各地から多くの参加者がある。いわば、神社が行う寺の名を付した祭りであり、パワースポットの伊集院参りといったところである。なお、JR伊集院駅前広場に、敵中突破のいさましい義弘公の騎馬像④が建てられているので見物するとよい。

4 八千万年前の大地が招く甕島を海遊する(図12)



④ 島津義弘公像(伊集院駅前)と徳重神社(日置市伊集院町)



薩摩よりみち④ 歩いて保存―「薩摩街道」

薩摩街道は鹿児島最南端・坊津から熊本、さらに福岡県筑紫野までの約300km、九州縦断の街道だ。参勤交代の薩摩の殿様、明治維新を成し遂げた西郷隆盛、大久保利通、さらにNHK大河ドラマの「篤姫」もこの街道を通って京都、江戸に向かった。

薩摩街道を子供たちと歩いて、保存しようと川内市を中心に地道な活動を続けているのが「薩摩街道保存会」(多目直樹会長、平成15年発足)。薩摩街道の道筋を記録した文書は意外に少ない。かつては街道沿いに松並木があったと伝えられるが、今は姿を消した。多目さんたちは「一本松」などの地名や古老の話などを聞き歩き、地点から線へと薩摩街道の道筋を特定する粘り強い活動を続けた。会員は街道歩きの際は自主的に、鎌や斧を持参、台風での倒木や枝、茂る雑草がりをしている。

特に力を入れているのは、子供たちの街道ウォーキング。会員がガイドや交通誘導役を買って出ている。沿道の全小学校の生徒は薩摩街道出水筋(約20km)を走破している。保存会発足7年目で、歩いた人は1万人を超えた。平成18年から19年には、鹿児島市の西田橋から熊本県境までの約120kmを約2000人がリレーし走破した。

「800mの強烈な急坂もありますが、子供たちには、そのきつさが大きな達成感、感動、そして自信になる」「歩きながら、車目線では見えない風景、感じられない風、寒さ暑さ、一杯のお茶、水のありがたさを知ることが出来る」と多目会長。

会の目標は、街道筋にもっと多くの「道標を立てる」ことで、薩摩街道を歩く人を増やすことだ。歩くことによって、保存活動が進み、深くなるからだ。

(玉川)



多目会長と福山氏

船の旅は、普段と異なり、出発するにしても、着くにしても、それを知らせる船笛に心迫るものがある。いよいよ未知へ出立の甕島、名残の甕島、などと。甕島は、川内港(薩摩川内市)または串木野新港(いちき串木野市)から船でわたる。夏期が多客期の臨時便(川内港)を除けば、甕島への船の便はフェリー、高速船共に午前、午後の2便が運航されている(甕島商船株0996-32-6458、同川内営業所0996-41-5100)。川内港からは高速船で里(さと)へ、串木野新港からはフェリーで里、鹿島、長浜への航路である(図1)。なお、川内駅から、川内港、および串木野新港へ船の出航に合わせたバスの運航があり、両港へのアクセスに好都合である。

「船笛で時知る暮らし島は秋」(森喜代子。第16回トンボロ芸術村コンテスト入賞作品)。

さて、甕島の有人島は上甕、中甕、下甕の3島である。このうち、上甕と中甕は、中島を挟んで2つの長大橋でつながる。中甕島と下甕島の間は甕大橋⑩は、建設の途中で台風の被害を受けるなどして長期に及んだが、2020年に完成した。したがって、いまでは、上甕、

そして中甑、下甑とつないで回遊することができる(図12)。全長は47kmであり、フルマラソン並みの距離である。

甑島は、江戸時代、島津藩の直轄となつてからも苦難が続いた。一つは、天草や長崎と同じく、キリシタンを受け入れたことで、島原の残党35人が処刑されたことである。それがキリシタン殉教の地である(1638年)。いま一つは、薩摩藩が浄土真宗を江戸期の300年にわたり禁じたことである。これは九州の他地域にみられないことで、相良藩(人吉藩)と島津藩(薩摩藩)に限ってのことである。ともに原因ははっきりしないが、相良藩は真幸院の北原氏と、島津氏は日向国の伊集院氏と争つた(庄内の乱)。その時の相手方が一向宗と関わり、あるいは一向宗一揆を恐れてのこととも推測されている。このため、1835年、下甑島の長浜村が焼き払われ(天保の法難)、また1862年、下甑島全島の住民が調べられた(文久の法難)。まさに、世界文化遺産「潜伏キリシタン」に該当する受難を二つのことで経験した南の孤島である。

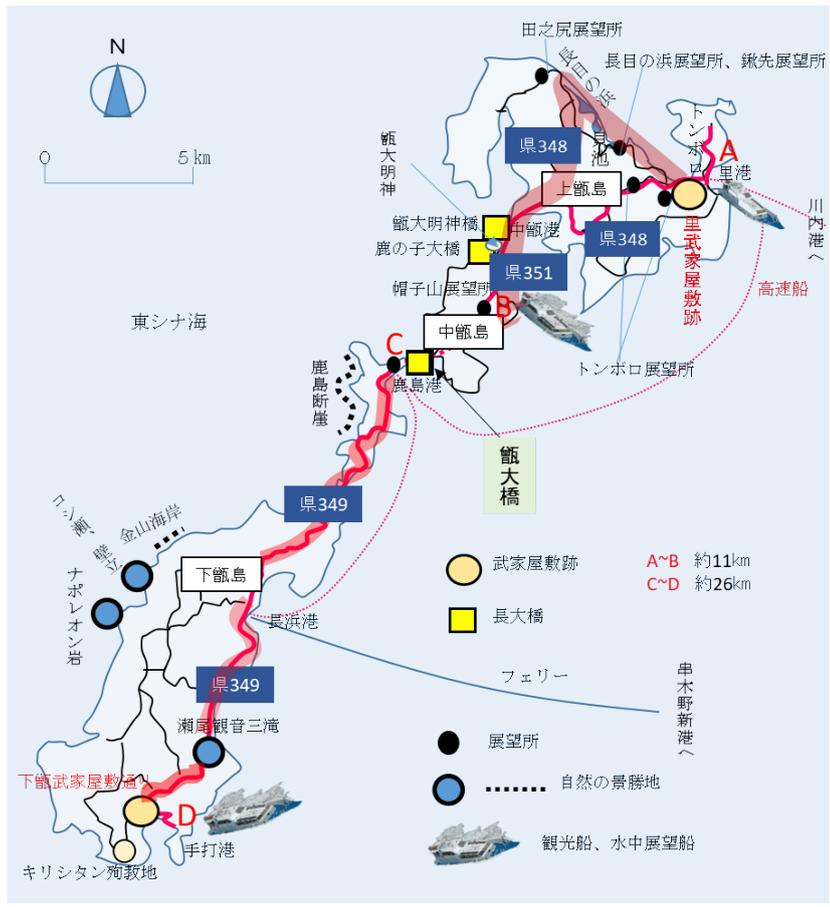


図12 8千万年前の大地が蘇る甑島国定公園



④ 瀬尾観音三滝の最下段の滝 (下甑島)



⑤ 見事にきれいな弧を描く手打湾の砂浜

加えて、1780年代には天明の大飢饉があつた。こうした苦難、災難から、島民はしばしば九州本土の各地や種子島などへの集団移住が強いられる苦難をなめた。狭い島だけに逃げ場もなく大変だったと推察する。

そして、現代はといえば、過疎化が激しく、島の存亡にかかわる苦難の時代を迎えている。島全体で見るとピーク時(1950年代)の人口2万5千人は、いまや5千人と5分の1である。このため、諸集落では空き地、空き家が増えつつあり、このままではやがて消滅するのではと懸念されるほどであり、その維持が困難になりつつある。しかし、これまでの惨事を越えてきた町民たちは、何としても、手つかずの自然と共に後世に残したいと願っている。

要するに、甑島は大切な国土であり、より多くの人々が寄り道し、手つかずの自然の驚異にひたり、前述の歴史の重みをかみしめることが望まれる。その意味で、甑島への道は巡礼の道であるともいえ、悲壮感が漂うものの、八千万年前からの不動の自然が残る道と思えば、地球誕生にも遡るタイムトラベルとなろう。

a 甑島烈島の拠点をなす上甑島と中甑島

上甑島の里港に到着すると、そこはトンボロの上に来た里町④である。最大幅1km、最狭部250m、長さ1.5kmで、人口は1200人ほど。

トンボロの付け根に、江戸時代からの武家屋敷跡②があり、玉石垣と生垣に囲まれ、手入れが行き届いた郷土の家が真つ直ぐに並んでいる。台風も多く高温多湿の中で、あるいは苦しい島の生活の中で、生垣の手入れ、屋敷の維持に大変な苦労があると推測され、そのことを思いながら見て回るとよい。

背後の高台に上がると、展望所からトンボロの全景⑨を見ることができ、また、そこから、海岸に沿うように県道352号を進めば、須口池、鉾崎池、そして貝池と海鼠池（なまこいけ）を巡ることができ、展望所⑩が設けられている。これらの池と海とは、砂州で隔てられているが、特に海鼠・貝池・鉾崎（かざき）の3池を隔てる砂州は延々と4kmに渡りつながっている。長目の浜と呼ばれ、国の天然記念物であるが、面積0.56km²の海鼠池（なまこいけ）は、離島にある湖沼にしては大きく、その限りにおいて日本第3位である。長目の浜、田之尻の両展望所からの眺めは絶景この上ない。また、3池の塩分濃度は、鉾崎池が最も薄く、貝池、海鼠池の順に濃くなっている。

長目の浜の反対側、中甕島方向へと県道348号を逆に回り込めば、中甕湾に面する中甕港に至る。そこから県道351号を進めば、甕大明神橋⑪、鹿の子大橋⑫があり、中甕島に渡ることとなるが、甕大明神橋の横に、甕の由来である甕大明神の岩がある。橋はそれを避けるかのように弧を描いている。

b 東シナ海に面し断崖絶壁なす下甕島

中甕島の長大なトンネルを抜けると蘭牟田瀬戸であり、そこに橋長1.5kmを超える甕大橋⑬が架かり、これを渡れば下甕島であるが、すぐにトンネルに入り、それを抜けて、鶴の巣山展望所へと上がれば、蘭牟田瀬戸と甕大橋の全景が眺望できる。その後、長浜港に向かえば、途中の島の最高峰・尾岳（標高604m）を過ぎ、島の中央の長浜に至る。この辺りに瀬尾観音三滝⑭があり、寄道するとよい。あるいは、島の反対側へは山道を超えて横断しなければならぬが、それを過ぎてひたすら南に下れば小さな集落・青瀬に至り、そこから連続する青瀬トンネル、手打トンネルを抜ければ南端のまち・手打である。そして、手打湾に出ると、写真⑮に見るように、きれいな弧を描く白い砂浜が目まぐるしく、別世界に来た思いがする。また、ここにも当然ながら武家屋敷⑯、津口番所跡がある。キリシタン殉教の地があり、漫画「D.E.T.診療所」のモデルになった手打診療所は手内港からバスで内陸へ20分ほどのところである。

海からの島の観光は、中甕港から観光船「かのこ」があり、手打港から「おとひめ」がある。前者（甕幸葉海業、TEL09969121150）は、鹿島断崖を巡るコースと、島の周りを巡るコースがある。鹿島断崖コース（約1時間）は、甕大明神の奇岩、

表3 直売所など

	名称	住所	電話	備考
出水市	出水駅観光特産品館「飛来里」	上鯖洲548-3	0996-62-2354	
	新鮮市場たこの	高尾町大久保617-1	0996-82-3004	
	物産直売所	高尾町大久保5471-2	0996-82-4615	
	特産館いずみ	下知識町479	0996-62-3033	
	野田郷高齢者野菜直売所	野田町下名5294-4	0996-84-2483	国道504号
阿久根市	野田郷村おこし屋	野田町下名145	0996-84-3560	
	にぎわい交流館阿久根駅内売店阿久根屋			
	市場食堂ぶえんかん&直売所	晴海町2阿久根漁港内	0966-73-2211	北さつま漁港直営
	道の駅「阿久根」	大川4816-6	0996-74-1400	国道3号
	駅マルシェ「旬なモノ市」	第1日曜日	11:00~18:00	にぎわい交流館阿久根駅
長島町	新鮮朝市	第2日曜日	9:00~11:30	水産振興センター
	阿久根旬の朝市	第3日曜日	9:30~11:30	Aコープ三笠店横駐車場
	くあからじよふるさと市	第4日曜日	9:00~12:00	広域農道沿い
	道の駅長島ボテハウス望洋	指江1576-1	0996-88-5531	国道389号
川内	道の駅・黒之瀬戸だんだん市場	山門野4093	0996-65-2202	国道389号
	ながしま恵比須市	第4日曜日午前	0996-86-1200	茅屋渠港地内 東町漁協
	川床ふれあいの郷	川床3444-8	0996-87-1212	県道47号
いちき串木野	道の駅樋脇「遊湯館」	樋脇町市比野156	0996-38-2506	県道42号
	川内・甕とれたて市	第4土曜日午後	0996-26-2011	薩摩川内市漁協事務所前
	東郷ふれあい館	東郷町谷淵1940-1	0996-42-0010	国道267号
日置市	さのき館	上名3018-5	0996-33-2030	
	季楽館	大里6166-1	0996-36-5618	国道3号
	照島海の駅	東島平町101	0996-33-1380	照島海の駅食堂 0996-32-9210
	シーポイント	西浜町19	0996-32-4456	
	羽島前浜育ちうんのもん	浜田町85-1	0996-35-0001	羽島漁業協同組合
	市来えびす市場	湊町1-99	0996-35-5082	
	薩摩串木野まぐろの館	八房3141-1	0996-29-5515	まぐろ料理専門店 松栄丸 0996-29-5517
日置市	串木野市漁協直営 海鮮まぐろ家	上名3018-3	0996-33-5015	海鮮・まぐろレストラン
	JA羽島がた海道 よいやんせ市場	羽島3511	0996-35-0007	
	チェスト館	伊集院町竹之山220-1	0996-84-2483	県道206、210
	江口蓬莱館	東市来町伊作田7425-	099-274-7666	江口漁協 国道270号
日置市	城の下物産館	日吉町日置2865-7	099-292-5890	
	江口漁協直売店・日吉支店	日吉町日置328-4	099-292-2011	国道270号

鹿島断崖⑬、コシ瀬、壁立、ナポレオン岩⑭、金山海岸と東シナ海側にあるものを巡るものだが、波が荒く注意が必要である。八千万年前からの光景を目の当たりにするとき、南の島とはいえ、九州にもこんなところがあるのかと驚きの連続である。天候や季節により運行が異なることから詳細は、こしきしま観光局（JR川内駅、099612511140）に問い合わせるとよい。

他方、手打港からの観光船「おとひめ」（7〜9月、2便/日、約1時間半）は、下甕を周回し、奇岩、断崖を見るものであり、先に紹介した中甕港からの観光船「かのこ」と一部重なるが、大部分は別である。合わせれば下甕島の風景全体が明らかになり、めったに寄り道できない甕島と思えば、いっそのこと両者ともに乗船し回遊することを薦めする。問い合わせ先は、下甕島支所経済課（0996917103111）である。

表 4 情報案内

市町	名称	住所	電話
出水市	出水市総合観光ステーション	上鶴淵715-16	0996-79-3030
	出水市産業振興部観光交流課	緑町1-3	0996-63-2111
	ツル博物館		0996-63-8915
阿市久根	阿久根市商工観光課	鶴見町200	0996-73-114
	阿久根市観光連盟「阿久根まちの駅」道の駅「阿久根」	塩鶴町-16 大川4816-6	0996-72-3646 0996-74-1400
長島町	長島町観光案内所	山門野4093	0996-87-0500
	獅子島屋	獅子島121-2	0996-89-3160
薩摩川内市	こしきしま観光局	鳥追町1-1	0996-25-1140
	川内駅観光案内所	鳥追町1-1	0996-25-4700
	川内港ターミナル観光案内所	港町京泊6131-23	0996-41-5100
	上甕島観光案内所里港ターミナル	里町里1619-13	0996-6-3930
	下甕島観光案内所長浜港ターミナル	下甕町長浜920-3	0996-5-1800
	鹿児島県薩摩川内市観光・シティセールス課	神田町3-22	0996-23-5111
	榊薩摩川内市観光物産協会	鳥追町1-1	0996-25-4700
	蘭牟田池観光案内所	那答院町蘭牟田1806	0996-56-0825
	ホームページ「こころ」薩摩川内観光物産ガイド	http://satumasendai.gr.jp/	
	Facebook	http://facebook.com/satumasendaicity/	
いちき串木野市	いちき串木野市役所観光交流課	昭通133-1	0996-33-5640
	いちき串木野総合観光案内所	上名3018	0996-32-5256
日置市	吉利物産店	日吉町吉利1022-1	099-292-5256
	日吉ふるさと館毘沙門	日吉町日置9045-1	099-292-5385
	日置市観光協会	東市来町湯田3299-1	099-274-5518
	日置市伊集院都市農村交流施設チェスト館	伊集院町竹之山220-1	099-273-9525

四 「薩摩よりみち街道」のホテル、特産品など

1 秘湯と共に、まち・島のいたるところに宿はある

薩摩よりみち風景街道の地域は、前述のように、おおまかには「いずみ」、「せんだい」、「こしき」の3ブロックに分けられ、それぞれに豊かな地域資源があり、早い時代から観光地としての整備が進んでいる。また、火山台地であることから一帯に秘湯が点在する。これらから、かつての藩主や領主はむろんのこと、半農半士の郷土たち、そして現代の農民や漁民たちの湯治場として盛んに利用されている。したがって、訪れる人のための宿泊施設は地域全体に広がって宿を選ぶとよいが、全体で見れば、すなわち、風景街道のスケジュールに合わせて宿を選ぶとよいが、全体で見れば、

2 海、山、川の多彩な特産品

出水市、薩摩川内市の中心部、および薩摩川内市の甕島に多い。例えば、温泉では市比野温泉（薩摩川内市樋脇）、薩摩高城温泉（薩摩川内市湯田町）、湯之元温泉（日置市東市来町）がある。いずれにしても旅館、民宿の類が多いのが特色である。それだけに薩摩隼人に直接接し、いろいろと地域の話聞きながら豊かな海の幸、山の幸が堪能できるが、そのこと自体、本風景街道の大きな楽しみでもある。

また、甕島は、当然だが、船が発着する里、長浜、それに手打に多くの宿泊施設が集まる。さらに、長島町の蔵の元港も旅館が多いが、これは天草市牛深とのフェリーがあることによる。

ホテルについては、JR出水駅、川内駅周辺で、新幹線の開業に伴い進出がみられ、100室程度の中規模のものが主である。

風景街道地域全体で、食に関わる特産品といえば、銀色に輝く小魚「きびなご」（ニシン科の熱帯、亜熱帯魚）がある。さしみ、煮つけ、焼物、てんぷらなど多彩に調理され、鹿児島を代表する食といつてよい。また、魚のすり身をあげた「つけあげ」はいわゆる「さつま揚げ」のことであり、どこにでも手に入れることができる。多種多様な魚が用いられ、そうした原材料や味付けの違いで土地、土地の工夫があることはいうまでもない。

飲み物はいわずと知れた焼酎だが、鹿児島は芋焼酎が本場である。正確なことは不明だが、北薩摩地域に甕島の2つを含めると10か所以上の蔵元がある。

昭和初期、出水市の小原地区が開拓された。その記念碑に、「味噌なめて晩飲む焼酎に毒はなし、煤けた嬢（かかあ）に酌させつつ」

とある。秋田出身の石川理紀之助の歌で、酒を焼酎に代えたとの解説が付くが、薩摩の人々にとり、焼酎は苦しい生活の糧であり、楽しい息抜きであった。そして、そこで歌われたのが、三章の冒頭に紹介した「薩摩兵児謡」。要するに、きびなご、さつま揚げ、芋焼酎が薩摩の伝統的な三大名物だが、これら以外にも多くの特産品がある。地域創生の目玉の一つでもあることから、思いつくままでできる限り紹介しよう。

★出水市

果物ではみかん、イチゴが、野菜ではたけのこ、ソラマメ、カボチャなどが有名である。また植木も盛んで、10〜5月に2のつく日に植木市が開かれている。海のもの、焼きのり、海産物がある。

★阿久根市

海のものとして、アジ、サバ、タカエビ、伊勢エビ、うなぎなど新鮮なものがあり、それらの加工品がある。山の幸としてはたけのこが特産である。

★長島町
東シナ海、長島海峡と漁場に恵まれ、瀬物、底物と豊富な種類がある。石鯛、イサキ、クロダイ。アジ、サバ、イワシも。さらに、あんこう、エソ、タカエビ。他にトラフグ、ヒラメなどがある。また、潜水漁によるイセエビ、アワビ、ウニや海藻類があり、実に多種である。



表5 道の駅一覧

阿久根	国道3号	0996-74-1400	鹿児島県阿久根市大川4816-6
------------	------	--------------	------------------



- 提供エリア及び提供時間 「総合案内所」内 8:30～19:00 (11月～3月 8:30～18:00)
- 情報提供機器 情報端末 1台、大型画面 1台、掲示板 1台
- 情報提供内容

[道路情報および近隣の「道の駅」情報] ルート、事故、渋滞、災害情報を情報端末、掲示板、地図・チラシで提供
 [観光情報] 駅周辺の観光、宿泊施設情報を情報端末、チラシで提供
 [医療情報] 医療機関の名称、電話番号、休日の当番医を情報端末で提供
 [他の「道の駅」の情報] 施設の内容、イベントを情報端末、チラシで提供
 [その他情報] 気象情報を情報端末、テレビで提供

黒之瀬戸だんだん市場	国道389号	099-65-2222	出水郡長島町山門野4093
-------------------	--------	-------------	---------------



- 提供エリア及び提供時間 「物産館」内 9:00～18:00
- 情報提供機器 掲示板 1台
- 情報提供内容

[道路情報および近隣の「道の駅」情報] ルート、災害情報を掲示板、地図・チラシで提供
 [観光情報] 駅周辺の観光、宿泊施設情報を掲示板、チラシで提供

長島	国道389号	0996-88-5531	出水郡長島町指江1576-1
-----------	--------	--------------	----------------



- 提供エリア及び提供時間 「24時間トイレ入り口物産館カウンター」 9:00～18:00
- 情報提供機器 情報端末 2台、掲示板 1台
- 情報提供内容

[道路情報および近隣の「道の駅」情報] 事故情報を掲示板、地図で提供
 [観光情報] 駅周辺の観光、宿泊施設情報を情報端末、チラシで提供
 [医療情報] 医療情報を掲示板で提供
 [他の「道の駅」の情報] イベントをチラシで提供
 [その他情報] なし

榎脇	県道川内加治木線	0996-38-2506	薩摩川内市榎脇町市比野156
-----------	----------	--------------	----------------



- 提供エリア及び提供時間 「観光案内所」 9:00～18:00
- 情報提供機器 掲示板 1台
- 情報提供内容

[道路情報および近隣の「道の駅」情報] ルート情報を案内人、地図・チラシで提供
 [観光情報] 駅周辺の観光、宿泊、入浴施設情報を案内人、チラシで提供
 [医療情報] 医療情報を掲示板で提供
 [他の「道の駅」の情報] 場所案内等を案内人が提供
 [その他情報] 気象情報をテレビで提供

★薩摩川内市
海の産物にちりめんじやこがある。また、川内川ではアユ、うなぎがとれる。やまの幸はきんかんが有名だが、ブドウ、ナシ、クリなどが賞味でき、東シナ海に面する砂丘には、らっきょうが植えられている。

★甕島
たかえびなどに加え、岩のりなどの海藻、かますの塩辛、干物がある。また、変わ

つたところでは、こしき海洋深層水、カノコユリ球根、椿油がある。

★いちき串木野市

遠洋漁業のまちで、マグロ漁が盛ん名で、マグロラーメンがあるほどである。また、豊富な水産加工品があり、果物としてポンカン（みかんの一種）がある。

★日置市

タケノコ的一种だが緑竹が有名である。他にお茶、イチゴが特産品である。また、菓子類には、島津家の家紋が入った伊集院饅頭があり、湯之元せんべいがある。

さらに、日吉瓦がある。また、陶器については、いちき串木野市島平に朴平意が上陸して串木野窯をつくり、その後、伊集院村大字苗代川（現在の美山）に移住したことが現在の薩摩焼であり、今では白薩摩と黒薩摩の2種類がある。

以上の特産品は、市内各地の専門店、商店、デパートなどで販売されているが、表3に直売所および表5に道の駅の物産館を一覧にして示す。薩摩ゆっくり風景街道を行くとき、途中で立ち寄るとよい。

3 祭り、イベント

薩摩よりみち風景街道地域における主な祭りやイベントを一覧にすれば表6のとおりである。一部は各地の風景街道を紹介する中で取り上げたが、それらを含め、どちらかといえば、五穀豊穰、武運長久、無病息災を祈るなど、素朴な願いの中で勇猛な踊りを披露する祭りが多い。いわば、祭りは、農村地域の人々の季節の風物詩といつてよく、運よく行き合わせれば薩摩の風習

表6 主な祭り、イベントなど

月	出水市	阿久根市	長島町	薩摩川内市 (甌島)	いちき串木野	日置市
1				東郷文弥節人形浄瑠璃 (下旬)		
2						
3	ツルを送る祭り (第3土)				つばきマラソン (鹿島町)	太郎太郎祭り (羽島崎神社)、ガウンガウン祭り
4		ひな女祭り	夢追い長島花フェスタ	田の神辰し (10日)	串木野マグロフェスティバル	
5						伊勢神社棒踊り (伊勢神社)
6				新田神社御田植祭		
7						
8	24時間高尾野ひまわり駅伝大会	あくね新鮮おさかな祭り	ご8日踊り	川内川花火大会、かずらたて (13日)	かずらたて (里町)、港まつり (鹿島町)	羽島太鼓踊り (南方神社)、川上踊 (川上地域)
9				川内大綱引き		虫追踊 (市来大里)
10	ツルマラソン大会 (下旬)			薩摩川内はんや祭り (第1日)	神祭りシアノーノー (下甌町)、甌大明神マラソン大会	妙円寺詣り
11	ツル観察センターオープン (1日)、出水麓まつり (上旬)		長島一周駅伝大会			流鏝馬 (大汝牟運神社)
12		あくねボンタンロードレース		入来神舞 (31日)	下甌島のトシドシ (31日)	

鮮な地場産品が手に入る。

いづれにしても道の駅には休憩所、情報館、物産館がある。これらと前述の主要鉄道駅、港のターミナルとを合わせれば、本風景街道地域内においては適切に休憩、情報案内所が配置され、地元の人も利用する新鮮な地場産品が手に入る。

4 情報案内および道の駅 (表5)

市町村ごとに観光関連の担当課や案内所があり、また、JR出水駅、JR川内駅、肥薩オレンジ鉄道の阿久根駅に観光案内所がある。

甌島については、九州本土の薩摩市内各案内所に加えて、上甌島の里港、下甌島の長浜港のターミナルに観光案内所がある。

道の駅は表5の4か所である。そのうち、阿久根、だんだん市場、長島は、風景街道のメインロードである国道3号、389号に沿ったところにある。しかし、道の駅「樋脇」は県道川内加治木線の沿道にあり、注意が必要である。

あくね新鮮おさかな祭りは漁業が盛んな阿久根市ならぬことであり、串木野マグロフェスティバルは、遠洋漁業の基地串木野の祭りである。

表5の祭りやイベントは、必ずしも常設の連絡所がない、スケジュールが確定しないこともあり、メモを示すに過ぎない。したがって、それらの正確なことは、各市町の観光関連の担当課および観光協会に問い合わせるとよい。

巻末地図一覧

- ・ 薩摩よりみち風景街道ルートマップ
- ・ 出水市、長島町
- ・ 阿久根市、薩摩川内市
- ・ 薩摩川内市、いちき串木野市、日置市
- ・ 上甌島・中甌島、下甌島



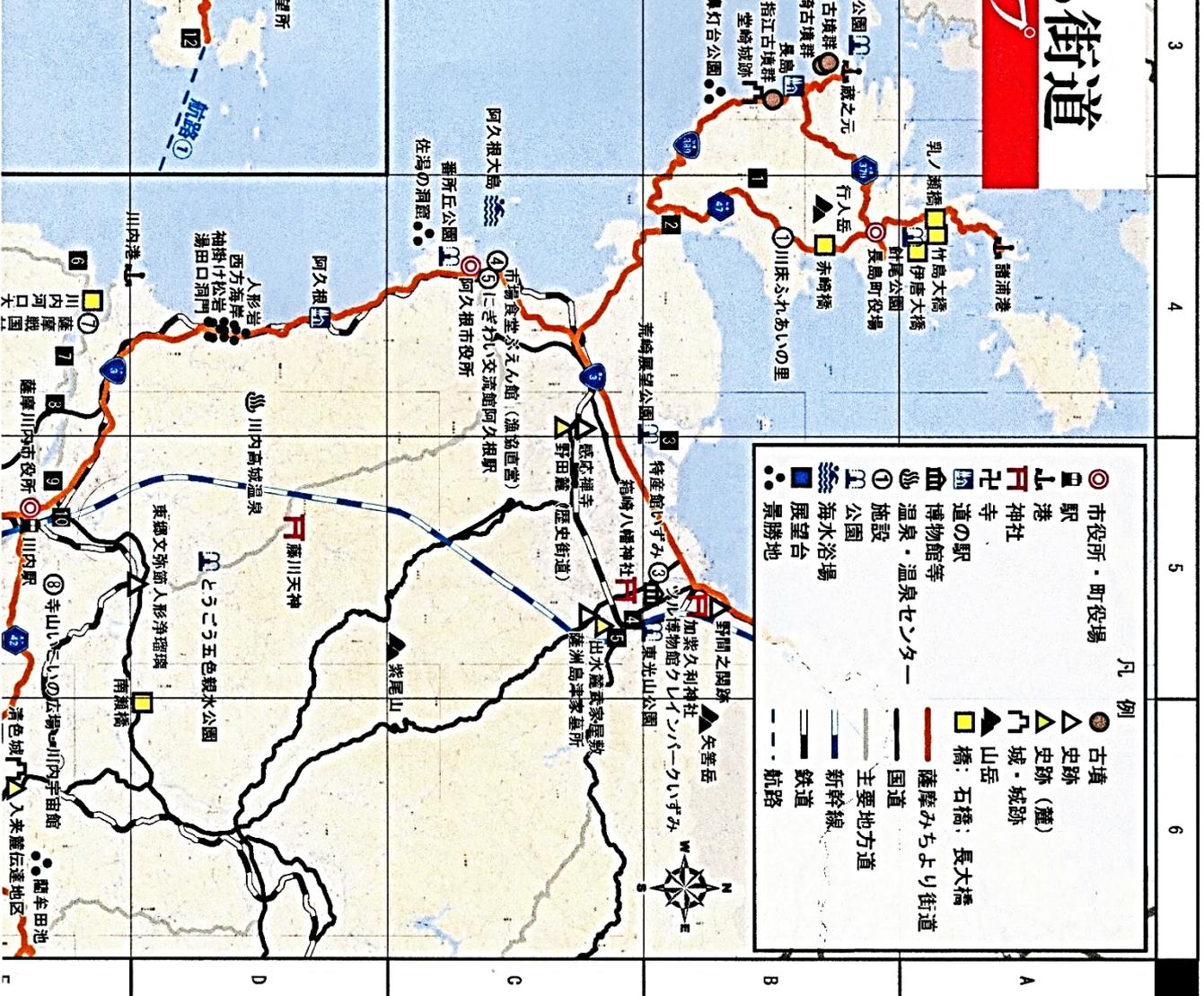
日本風景街道 薩摩よりみち街道 ルートマップ

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1 | ● 毎来風車公園展望所
● 上り浜・潮風の段々畑 |
| 2 | ① 黒之瀬戸だんだん市場
② うずしおパーク
③ 黒之瀬戸大橋 |
| 3 | ④ ツル観測センター
● 鶴の飛来地 |
| 4 | ◎ 出水市役所
● 出水駅 |
| 5 | ● 出水歴史民俗資料館
● 出水の大橋 |
| 6 | ⑥ 川内原子力発電所
⑦ 小野神社
⑧ 久見崎軍港跡 |
| 7 | ⑨ 南方神社
⑩ 長崎堤防 |
| 8 | ▲ 高江麓武家屋敷
▲ 用水路橋
▲ 江の口橋（石橋） |

- | | |
|---|---|
| 9 | ⑪ 武内神社
⑫ 新田神社・可愛山陵
⑬ 宮内麓武家屋敷
⑭ 降来橋
⑮ 養平寺
⑯ 川内歴史資料館
⑰ 薩摩園分寺跡公園 |
|---|---|

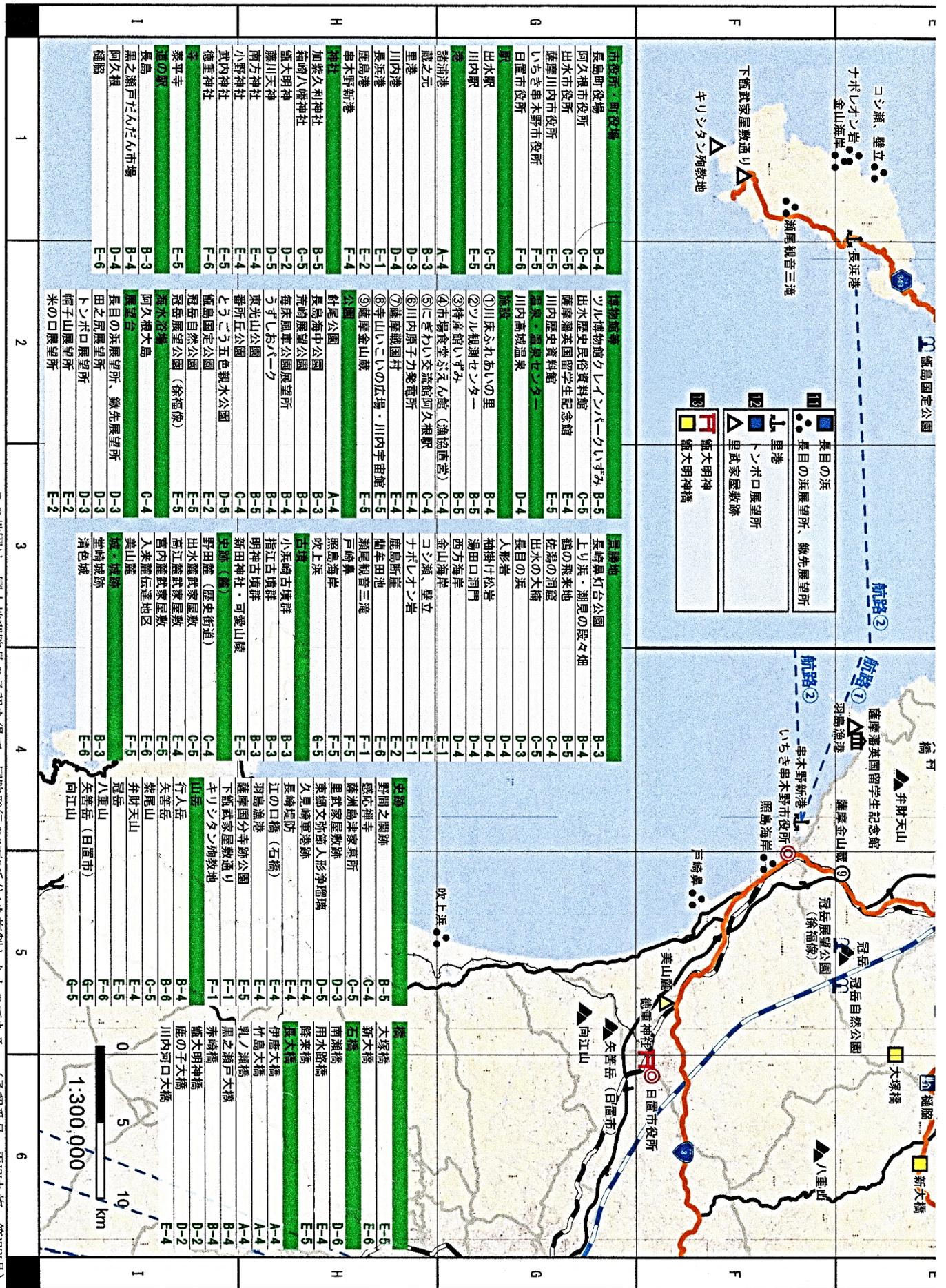
- | | |
|---|---|
| D | ● 米の口展望所
● 帽子山展望所
● 鹿島断崖
● 鹿島港 |
|---|---|

- | | |
|----|------------------------------|
| 10 | ⑱ 田之尻展望所
⑲ 鹿の子大橋
⑳ 航路① |
|----|------------------------------|



凡例

◎	市役所・町役場	●	古墳
○	港	▲	史跡（麓）
□	神社	■	城・城跡
△	道の駅	▲	山岳
①	博物館等	▲	橋：石橋；長大橋
②	温泉・温泉センター	—	薩摩みちより街道
③	施設	—	主要地方道
④	海水浴場	—	国道
⑤	展望台	—	新幹線
⑥	景勝地	—	鉄道
⑦		—	航路



寺役所・町役場	長島町役場	B-4
	阿久根市役所	0-4
	出水市役所	0-5
	陸奥川内市役所	E-5
	いちき串本野市役所	F-5
	日置市役所	F-6
	出水駅	0-5
	川内駅	E-5
	徳之元	A-4
	里港	B-3
	川内港	D-4
	長浜港	E-1
	屋島港	E-2
	串本野新港	F-4
	神社	
	加茂久利神社	B-5
	宿崎八幡神社	0-5
	徳大明神	D-2
	藤山天神	D-5
	南方神社	E-4
	小野神社	E-4
	武内神社	E-5
	徳重神社	F-6
	泰平寺	E-5
	道の駅	
	長島	B-3
	黒之瀬戸だんらん市場	B-4
	阿久根	D-4
	榎崎	E-6

博物館等	ツル博物館クレーンパークいずみ	B-5
	出水歴史民俗資料館	0-5
	陸奥歴史民俗資料館	E-4
	川内歴史資料館	E-5
	黒島・黒島センター	
	川内高城温泉	D-4
	施設	
	①川床ふれあいの里	B-4
	②ツル観測センター	B-5
	③特産館いずみ	B-5
	④市場食愛ふえん館(漁師直営)	0-4
	⑤にぎわい交流館阿久根駅	0-4
	⑥川内原子力発電所	E-4
	⑦藤原織田村	E-4
	⑧寺山いごいの広場・川内宇宙館	E-5
	⑨陸奥金山蔵	E-5
	公園	
	針尾公園	A-4
	長島海中公園	B-3
	荒崎展望公園	B-4
	毎夜風車公園展望所	B-4
	うずしおパーク	B-4
	東光山公園	B-5
	播磨丘公園	0-4
	とうごう五色親水公園	D-5
	冠島定公園	E-2
	冠島自然公園	E-5
	冠島展望公園(徐福像)	E-5
	海水浴場	
	阿久根大島	0-4
	展望台	
	長目の浜展望所、鏡先展望所	D-3
	田之尻展望所	D-3
	トンボロ展望所	D-3
	嶋子山展望所	E-2
	米の口展望所	E-2

景勝地	長崎鼻灯台公園	B-3
	上り浜・潮風の段々畑	B-4
	鶴の飛来地	B-5
	佐藤の洞窟	0-4
	出水の大橋	0-5
	長目の浜	D-3
	人影岩	D-4
	榊掛け松岩	D-4
	湯田口洞門	D-4
	西方海岸	D-4
	金山海岸	E-1
	吹上浜	E-1
	ナボレオン岩	E-1
	鹿島断崖	E-2
	楠幸田池	E-6
	瀬尾観音三滝	F-1
	戸崎鼻	F-5
	照島海岸	F-5
	吹上浜	6-5
	古墳	
	小浜崎古墳群	B-3
	指江古墳群	B-3
	新田古墳群	B-3
	明神神社・可愛山陵	E-5
	史跡(古)	
	野田麓(歴史街道)	0-4
	出水麓武家屋敷	0-5
	高江麓武家屋敷	E-4
	宮内麓武家屋敷	E-5
	入来麓伝説地区	E-6
	美山麓	F-5
	城・城跡	
	豊崎城跡	B-3
	清色城	E-6

史跡	野間之関跡	B-5
	冠成禅寺	0-4
	藤洲島墓家墓所	0-5
	里武家屋敷跡	D-3
	栗畑文弥新入形浄瑠璃	D-5
	久見崎軍港跡	E-4
	長崎堤防	E-4
	江の口橋(石橋)	E-4
	羽島漁港	E-4
	陸奥国分寺跡公園	E-5
	下瀬武家屋敷通り	F-1
	キリシタン殉教地	F-1
	山岳	
	行人岳	B-4
	安善岳	B-6
	柴屋山	C-5
	弁野天山	E-4
	冠岳	F-5
	八重山	F-6
	矢野岳(日置市)	G-5
	向江山	G-5

橋	大塚橋	E-5
	新大橋	E-6
	石橋	E-6
	南瀬橋	D-6
	用水路橋	E-4
	隆来橋	E-5
	長六橋	E-5
	伊庭大橋	A-4
	竹島大橋	A-4
	乳ノ瀬橋	A-4
	黒之瀬戸大橋	B-4
	赤崎橋	D-2
	徳大明神橋	D-2
	鹿の子大橋	D-2
	川内河口大橋	E-4

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1を複製したものである。(承認番号 平XX九複、第XXX号)

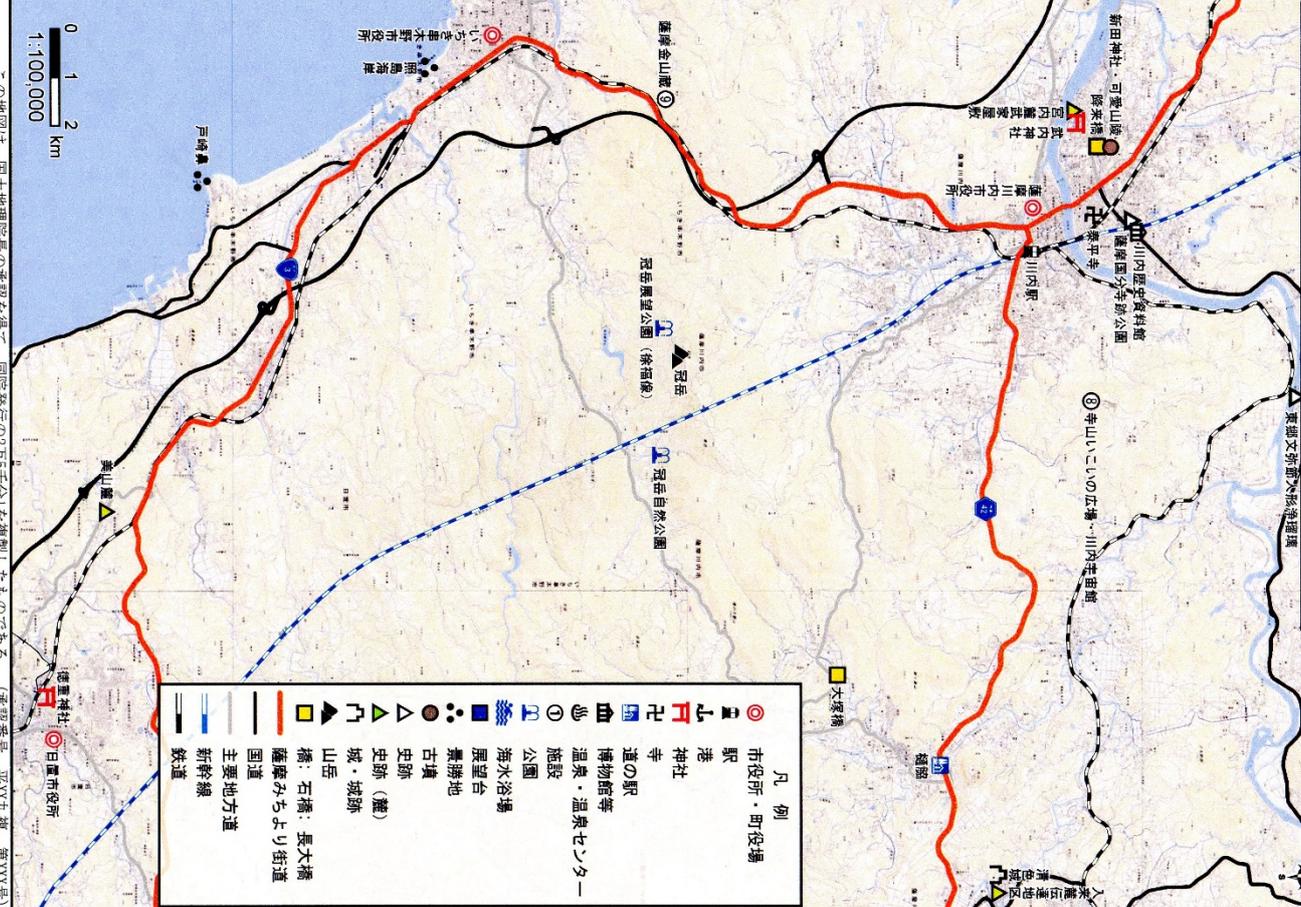
阿久根市・薩摩川内市(拡大)



- 凡例
- 市役所・町役場
 - 駅
 - 港
 - 神社
 - 道の駅
 - 博物館等
 - 温泉・温泉センター
 - 施設
 - 公園
 - 海水浴場
 - 展望台
 - 景勝地
 - 古墳
 - 史跡(難)
 - 史跡・城跡
 - 山岳
 - 橋: 石橋: 長大橋
 - 薩摩みちより街道
 - 国道
 - 主要地方道
 - 新幹線
 - 鉄道

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1を複製したものである。(承認番号 平XX九環、第XXX号)

薩摩川内市・いちき串木野市・日置市(拡大)



- 凡例
- 市役所・町役場
 - 駅
 - 港
 - 神社
 - 道の駅
 - 博物館等
 - 温泉・温泉センター
 - 施設
 - 公園
 - 海水浴場
 - 展望台
 - 景勝地
 - 古墳
 - 史跡(難)
 - 史跡・城跡
 - 山岳
 - 橋: 石橋: 長大橋
 - 薩摩みちより街道
 - 国道
 - 主要地方道
 - 新幹線
 - 鉄道

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分1を複製したものである。(承認番号 平XX九環、第XXX号)

九州風景街道のガイドブック一覧 List of Guidebook of Scenic Byway Kyushu

<http://www.qsr.mlit.go.jp/n-michi/fukeikaido/guidebook.html>

(上記のホームページからコピーできます。(無料))

全体編 ○Japanese Edition: 九州の風景街道 その1 総論

○English Edition : Scenic Byway Kyushu Part 1 Overview

その2 ルート別ガイド

Part2 Leaflet by Route

日南海岸きらめきライン	Q-①	Nichinan Sparkling Coast
日豊海岸シーニック・バイウェイ	Q-②	Nippo Seashore Road
ながさきサンセットロード	Q-③	Nagasaki Sunset Highway
北九州おもてなし“ゆっくりかいどう”	Q-④	Kitakyushu Hospitality Roads
ちょっとよりみち唐津街道むなかた	Q-⑤	Munakata Historic Byway
かごしま風景街道	Q-⑥	Kagoshima Scenic Byways
玄界灘風景街道	Q-⑦	Genkai Coastal Highway
九州横断の道やまなみハイウェイ	Q-⑧	Yamanami Highland Parkway
九州横断の道阿蘇くまもと路	Q-⑨	Aso/Kumamoto Scenic Roads
豊の国歴史ロマン街道	Q-⑩	Toyonokuni History Roads
みどりの里・耳納風景街道	Q-⑪	Green Village in Minou Mountains
別府湾岸・国東半島海への道	Q-⑫	Scenic Area of Beppu Bay and Kunisaki Pen.
あまくさ風景街道	Q-⑬	Amakusa Islands Drive
薩摩よりみち風景街道	Q-⑭	North Satsuma Scenic Tour
島原半島うみやま街道	Q-⑮	Umi-Yama Scenic Byway in Shimabara Pen.



九州風景街道ガイドブック

人のくに、美のくに九州 Q-14 薩摩よりみち風景街道

令和 2 年 7 月 1 日 2 版

日本風景街道九州ガイドブック編纂委員会

樗木武、堤昌文、玉川孝道、吉武哲信、榎谷秀秋

薩摩よりみち風景街道担当

(監修) 玉川孝道 (文責) 樗木 (ちしゃき) 武

協力：薩摩よりみち風景街道推進協議会



発行 九州風景街道推進会議

風景街道推進会議事務局 (九州地方整備局 道路管理課内)

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製 (コピー) することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。